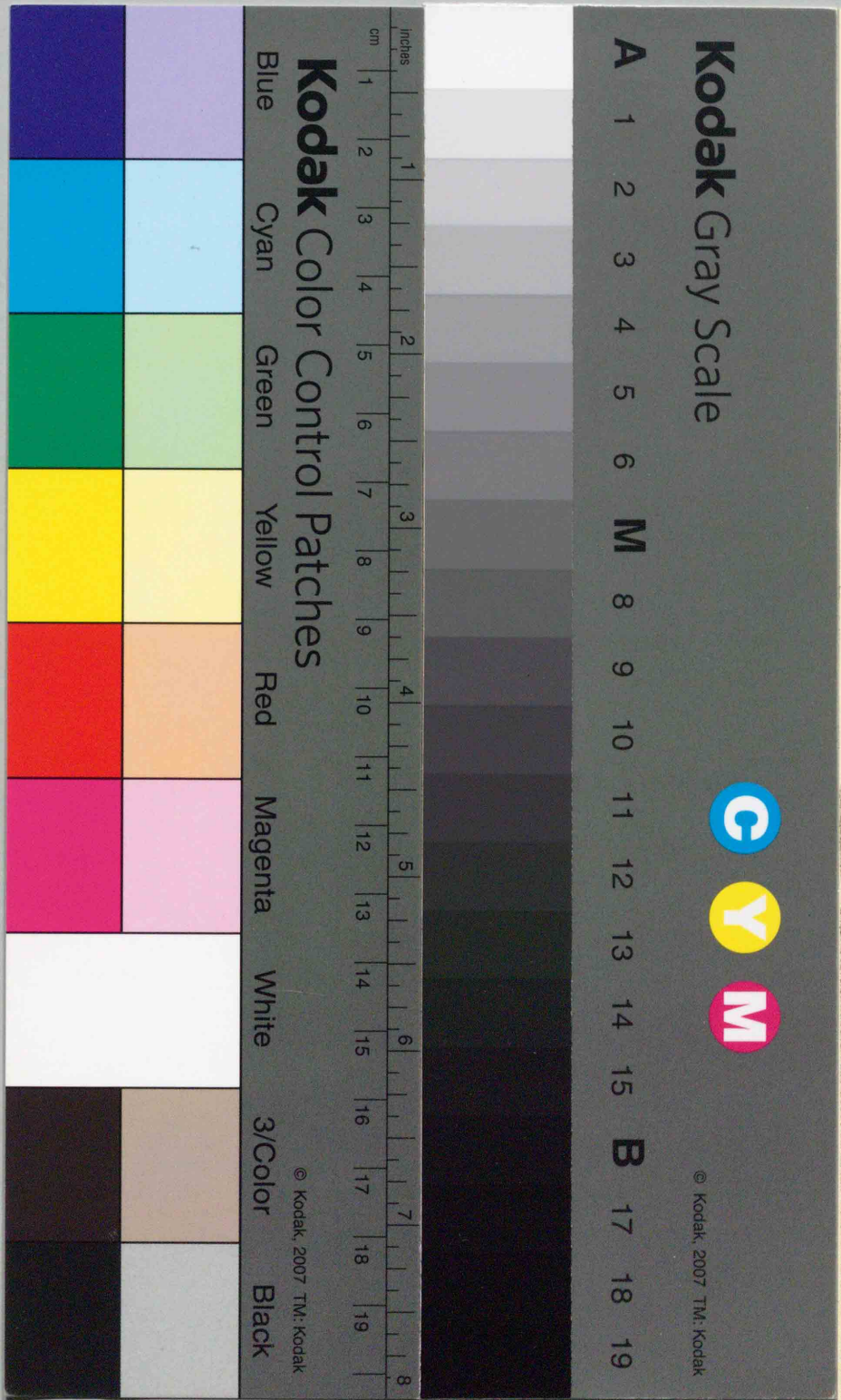
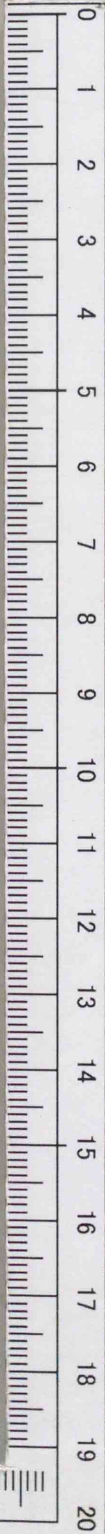


訂改 帝國新讀本 卷六

3759  
H27  
資料室



41580

教科書文庫

4
810
41-1927
20000 41747

82

101





資料室

375.9  
Ha7

文部省檢定濟

中學國語科用

昭和二年十月二十七日

文學博士芳賀矢一編

改訂  
帝國新讀本

東京

合資會社  
富山房發兌

所定  
昭和二年十月二十七日



古 懷



筆江曲田町 原河安天





訂改 帝國新讀本 卷六目次

一	野邊の秋風(短歌).....	一
二	唯一の姿.....	水谷まさる 四
三	秋窓雜記.....	北村透谷 一〇
四	十訓抄と著聞集.....	一五
	一 都良香.....	一五
	二 能因法師.....	一六
	三 鳥羽僧正.....	一七
五	平安京.....	藤岡作太郎 一八
	京の雨(自修文).....	荻原井泉水 二四
六	東洋の秋.....	芥川龍之介 二七



七 流泉啄木……………(今昔物語)…三二

八 東大寺……………薄田泣菫…三六

九 松の下露……………(太平記)…四〇

一〇 懐古……………島崎藤村…四四

        大宮人と武士(自修文)……………萩野由之…五〇

△二 碓氷だより……………徳富健次郎…五五

三 最後の参内……………(太平記)…五九

四 趣味の生活……………小林一郎…六三

△四 冬の山里(短歌)……………三三

△五 日本人と自然美……………吉田絃二郎…七九

        啄木鳥を聴く日(自修文)……………田山花袋…八四

△六 常に新しいといふこと……………野口米次郎…八五

△七 私は自然を禮讃する……………

△六 春の樂み……………貝原益軒…九一

△九 人臣の道……………北畠親房…九六

△一〇 我が國體と萬世一系の信條……………黑板勝美…一〇三

△一一 春立つころ……………金子薫園…一二三

△一二 早春の賦……………阿部次郎…一二五

        蓑蟲と蜘蛛(自修文)……………吉村冬彦…一三八

△一三 鎮西八郎……………(保元物語)…一三六

△一四 扇の的……………(平家物語)…一三三

△一五 仁は心のいのち……………室鳩巢…一三七

        笑(自修文)……………戸川秋骨…一四三

△一六 文學と氣品……………(兜)……………一四九

△一七 高名の木のぼり……………吉田兼好…一五四

△一八 明淨直……………五十嵐力…一五九



元 三つの眺……………一六四

三 樹の根……………和辻哲郎…一七一



試験  
野邊

訂改 帝國新讀本 卷六

一 野邊の秋風

しら雲に羽うちかはし飛ぶかりの  
かすさへ見ゆる秋の夜の月

よみ人しらす

千年まで契  
し松も今日  
よりかは君に  
ひつかれてよ  
ろつよやへ  
む(天中臣能  
宜の歌

千年まで契し松も今日よりかは君に  
ひつかれてよろつよやへむ(天中臣能  
宜の歌

蹟筆成俊原藤傳

夕されば野邊のあき風身にしみて

藤原俊成



(一)江戸の國學者、  
靜齋と號す。  
の門人。安永  
六年(二四三  
七年)歿。年五  
十三。或は五  
十七。

(二)歌人。堀河、鳥  
羽、崇徳の三  
朝に仕へた。  
金葉集の撰者。

三千年にな  
るてふもよ  
のことしよ  
りはなかく  
はるにあひ  
にけるかな

(三)歌人。建久二  
年攝政となつ  
た。建永元年  
(一八六六年)  
歿。年三十八。  
(四)俊成の子。新  
古今集の撰者。  
仁治二年(一  
九〇一年)歿。  
年八十。

(一)藤原安綱の子  
古今和歌集撰  
者の一人。

(二)参議藤原資房  
の子。

うづら鳴くなりふか草の里

(一) 加藤宇萬伎

もののふの草むすかばね年ふりて

秋風さむしきちかうが原

(二) 源 俊 頼

松風の音だに秋は寂しきに

ころもうつなり玉川の里

(三) 藤 原 良 經

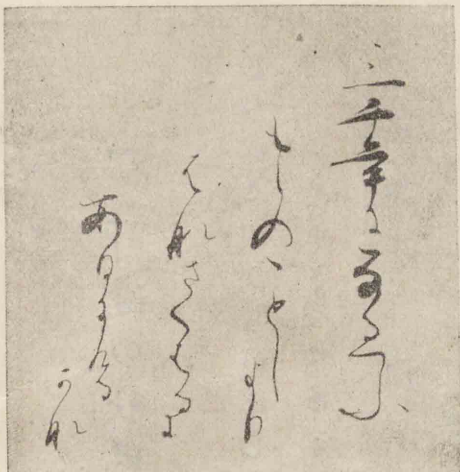
人すまぬ不破の關屋の板庇

あれにし後はたゞ秋の風

(四) 藤 原 定 家

みわたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやのあきのゆふぐれ



藤原定家筆蹟

(一) 壬 生 忠 岑

山里は秋こそ殊にわびしけれ

鹿のなく音に目をさましつゝ

(二) 藤 原 資 宗

いかだしよ待てこととはん水上は

いかばかり吹く山のあらしぞ

小 澤 蘆 庵

くりもゑみ柿もいろづきうなゐらが

ほこらしげなる時は來にけり

賀 茂 眞 淵

しなのなるすがのあら野をとぶわしの

つばさもたわに吹くあらしかな



## 二 唯一の姿

水谷まさる

或日、私は久しい以前から大切にしておいた白い大理石の一輪挿に、庭に咲いた桔梗の花を挿さうと思ひ立つた。

白い大理石をまろらかに磨いて、下つぼみに削つてある小さいこの一輪挿に、紫の桔梗の花が、稍斜に、ゆつたりと、落着く所に落着き得たといふやうな姿で挿された時のことを、私は美しい幻に描いたのである。

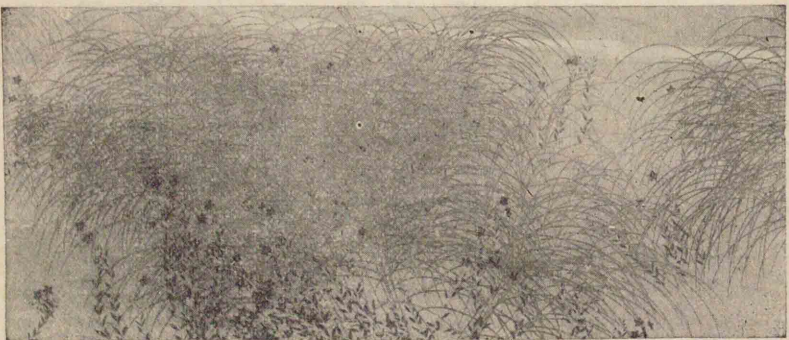
私は早速庭に下立つて、銀色の鋏をわざとちやきちやき鳴らし、て、まだ露の乾いてゐない桔梗の莖を、ちよきつと剪つたのである。そして机に歸つて、その一輪挿に挿して見た。

挿すにはいろいろ考へなければならなかつた。初は桔梗の枝が、一輪挿に比べて少し長いやうに思はれた。私は五分許切つて見た。

まだ長い。それで今度は二分許切捨てた。どうやら落着いたやうである。今度は葉が問題になつて来た。下の方の葉が、一輪挿の口に餘りこみ過ぎてゐるやうな気がした。そこで一二枚もいで捨てた。

それからが問題である。私はこの桔梗を、少し左の方へ傾けて挿すのがよいか、それとも右の方へ曲げるやうにするのがよいか、ちよつと惑はずにはゐられなかつた。

「自然のままに挿せばよいではないか。」さういふさゝやきが、ちらと私の心の上を通り過ぎた。でも、私はそのさゝやきに従ふ氣にはなれなかつた。



花 野 (筆月契池菊)



一體、一輪挿に挿すといふ以上は、それがもはや自然のまゝではない。自然のまゝにといふならば、一層庭に咲かして置いた方がよい。すでに庭から剪つて来た以上、そして一輪挿に挿さうと思ひ立つた以上は、どういふ風に挿したらよいかといふことは、自然問題になつて來なくてはならない。これがそのさゝやきに對する私の心の答であつた。

だから私は、強ひてそのさゝやきに心を傾けることなしに、なほも桔梗の一莖をいろいろの姿に一輪挿に挿して見た。斜に挿す爲の角度を具合して見たり、右か左かへ斜にしようとしたり、花二つもつ莖に、もう一つ荅をつけた一本を添へて見ようかと考へたり、いろいろに思ひ惑つたのであつた。

でも、それは私にとつて興味ある惑であつた。それが私にはまるで自分の藝術を表現する時の、苦しいけれども愉快な、痛いけれども

も快いといふあの氣持と、似たものがあることを知つた。

私はじつと眼を瞑つて見た。私は白い大理石と、紫の桔梗とがお互に相寄つて、びつたりと動かないところまで頼合つて、抱き合ひすがり合つて作るそのすばらしい釣合と調和とを、再び心に描いて見た。そしてその姿が、いかにも自分の望んであるところを十分に満たすことができるやうな氣がしたが、その形は再び眼を開いた時には逃げてしまつた。崩れてしまつた。でも私は、その形を捕へなければならぬと思つた。

唯一の姿——おゝ、さうだ。この一輪挿とこの一莖の桔梗とが相寄つて作る姿には、確かに唯一のものがなくてはならぬ。どういふ風に挿しても構はないといふ氣持でやつてはならない。どうあつてもその唯一の姿を探し出さなくてはならない。

私がかう考へることは、私の氣紛れであらうか。いこぢであらう



か。いや、さうではない。眞の美を見出す爲には、自分の望む唯一の姿を探さなければならぬ。若しそれが不必要だといふなら、畫家はいろいろ苦心する必要はない。文學者も最も適した正確な言葉を苦心して探す必要がどこにあらうか。

たゞむやみに繪の具を筆に含ませてなすりつけたり、たゞむやみに思ひついた言葉で筆を走らせたりする。さうしたやり方は、表現しようとするものを十分に味はひ眺めた藝術家にとつて、餘りに樂過ぎるものではないか。

私は長い間、唯一の姿を探した。これが最美のものであると、はつきり自分に向かつて斷言し得るところの唯一の姿を。私は長い間あれこれと桔梗をさしかへてゐた。一輪挿のよく磨かれた大理石の面には、うつすらと私の沈んだ顔が映つた。

やがて私は漸くのことと、唯一の姿だと思ふものを表すことが

できたので、思はずほゝゑみを洩らした。桔梗は稍左へ傾いて、莖の上部を少し曲げて、葉を一つ捨てて、輕快な感じが多くなるやうに工夫された。

唯一の姿を求めて、じれて沈んだ氣持になつた私は、まづまづ自分の満足できる姿を探しあてて、急に晴れやかな心を取返したのであつた。

たゞそれだけのことだ。とりたてて書くにも當らないやうな、全く或日の私の氣紛れであつたかも知れない。

だが、かういふ唯一の姿を探すといふ氣持について、皆さんに少しでも反省の或ものを供することができるならば、私のこの文を書いたことも、全くむだではなからうと思ふ。

— 夢と影 —



三 秋窓雜記

北村透谷

五情を沒了す

悲しきものは秋なれど、また心地よきものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜しけれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を酔はしむると月の人を清ましむるとには、自ら味はひを異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは、世俗の免るゝ能はざるところながら、我は萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。

二

身事匆忙

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて、居ること僅かに二日。思へらく、この秋こそはここに來りて、よろづの秋の悲しさを味ははんと。圖らざりき、身事匆忙として、空しく中秋の好時

駕御す

節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。されど秋は鎌倉に限るにあらず。人間到る所に詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道はこれにこそあれ。

三

我が庵もまた秋の光景には洩れざりけり。喉鳴きやぶるばかりの鶉の聲々高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかここかとうち見れば、そこにもあらず、ここにもあらず。窓を閉ぢて書を繙けば、一層高く聞ゆなり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なれど、秋の聲ぞと聞けば、そのおもしろさ讀書の類にあらず。

四

病みて他郷にある人の身の上を氣遣ふは、人も我も變らじ。されど我は常に健全なる人の、たまたま病みて臥床するを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは、富める人の道に入り



微恙

難きに等しからん。世には體健かなるが爲に心健かならざるもの多ければ、常に健かなるもの十日二十日病床に臥すは、さまで恨むべきにあらず。ましてこの秋の物色に對して、命運を學ぶことよなきたよりあるをや。かく我は眞意を以て、微恙ある友に書遣れり。

五

萩、薄我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如くこれ等の草花を珍重すること能はず。我は荒漠たる原野に、名も知らぬ花を愛づる心はあれども、園藝の些技にて作り出でたる矮小なる自然の美を、さほどに嬉しと思ふ情なし。さはいへど、敢へて在來の詩人を責むるにはあらず、また自己の愛するところをいはんともあらず。ただ我が秋に對する感の一として記すのみ。

六

鴉こそをかしきものなれ。我が山庵の窓近く下立ちて、我をなが



(筆 濤 秋 畑 田) 鴉

し目に見おこしたる後、逐へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば、脚を立て首を揚げて、飛去らんとする氣色は見すれど、我が害心なきを知ればにや、たゞ足を揃へて跳り歩くのみ。浮世は廣ければ、かゝる曲者を置きたりとして、何の障にもなるまじけれど、その芥ある所に集り、穢物ある所に群るの性あるを見ては、人間の往々これに類するもの多きに想ひ到りて、聊か心悪くなりたれば、物を投ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時、かあかあと鳴く聲は、我が局量を嘲るものの如し。げに皮肉家といふもの、文界のみにあらざりけり。



七

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、こほろぎの聲を聞くは、眞の秋の情なるらん。その聲を聞く時に希望もなく、失望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲、鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書、古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。一こほろぎの爲に我は眠の惜しまれて、物思なき心に思を宿しけり。

八

芭蕉の葉色秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるに、そが中をうかゞひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を弾ずる面影、凜乎として俗世のものにあらず。その律調の端正なること、今の世の浮華なる音楽に較ぶべからず。嬉しきことに思ひぬ。

透谷集

四 十訓抄と著聞集

一 都良香

都良香、竹生島に参りけるに、眺望心に澄みて、「三千世界眼前盡」といふ句を作りて、その末を案じ得ざりければ、靈天託宣を下して、「十二因縁心裏空」と、一句加へ給ひけり。

同じ人羅城門を過ぐとて、氣霽風梳新柳、髪と詠じたりければ、樓上に聲ありて、氷消浪洗舊苔、鬚とつけたりけり。

良香、菅丞相の御前にて、この詩を自讚し申しければ、下の句は鬼の詞なり」とぞ仰せられける。(十訓抄)



竹生島 山西 翠嶂 筆

(一) 儒者。初名言道。文章博士。元慶三年(一〇五三年)歿。年三十六。在る。

(二) 琵琶湖の北部に在る。

託宣

(三) 平安京の正南門。

(四) 菅原道真。自讚



(一) 歌僧。後鳥羽天皇頃の人。

感應す

(二) 三島神社。愛媛縣大三島に在る。

能因入道、伊豫守實綱に伴なひて、かの國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照りて、民の歎あさからざるに、神は和歌に感應し給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を、國司頻りに勸めければ、

天の川苗代水に

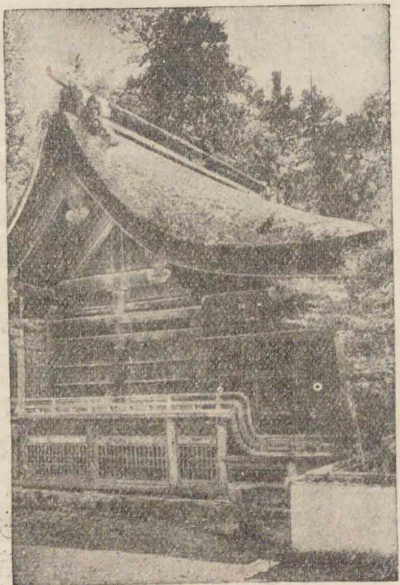
せき下せ天くだり

ます神ならば神

みてぐら

と詠みて、みてぐらに書きて

神官<sup>(一)</sup>して申し上げさせれば、炎旱の天俄に曇りわたりて、大きな雨降りて、枯れたる稻葉押並べて緑に復りにけり。忽ちに天災を和ぐる<sup>(二)</sup>こと、唐の貞觀<sup>(三)</sup>の帝の蝗<sup>(四)</sup>を吞めりける故事にも劣らざりけ



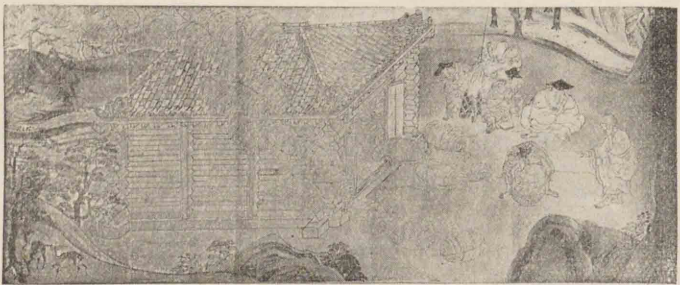
大島神社

(三) 太宗のこと。貞觀は太宗の年號。

(一) 磐城國(福島縣)西白河郡古關村。

念なし

(二) 名は覺猷。戯畫の名手。延六年(一〇〇八年)寂。八十八年。京洛東岡崎町の南に在つた。仁以。後亡び。仁以。河天皇の建立。



鳥羽僧正筆蹟

この入道は至れるすきものにてありければ、

都をば霞とともにたちしかど

あきかぜぞふく白河の關

と詠めりけるを都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知らせず久しく籠りゐて色を黒く日にあたりなして後、陸奥國のかたへ修行のついでに詠みたりとぞ披露しはべりける。(古今著聞集)

三 鳥羽僧正

鳥羽僧正は近き世にはならびなき繪かきなり。法勝寺金堂の扉の繪かきたる人なり。い



(一)鳥羽法皇

入興

比興

つほどのことにか、供米不法のことありける時、辻風の吹きたるに米の俵を多く吹揚げたるが、塵灰の如くに空に揚るを、大童子おほむらこ法師はふしばら走り寄りて、取りとゞめんとしたるを、さまざまにおもしろう筆を揮ひて書かれたりけるを、誰かしたりけん、その繪を院御覽じて、御入興ありけり。その心を僧正にお尋ねありければ、餘りに供米不法に候ひて、まことのものは入り候はで、糟糠わづのみ入りて軽く候ふ故に、辻風に吹揚げられ候ふを、さりとはとて、小法師ばらが取りとゞめんとし候ふがをかしう候ふを、書いて候。と申されければ、比興のことなりとて、それより供米のさた厳しくなりて、不法のことなかりけり。古今著聞集

### 五 平安京

藤岡作太郎

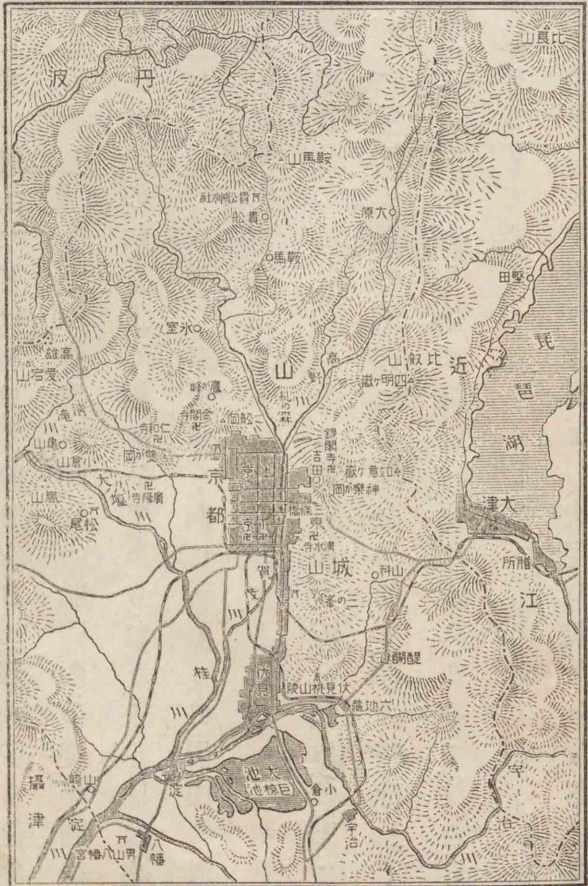
日本は世界の樂土なり、東亞のイタリ一なり。山川の風景行く所

Extract

幽婉

(二)高尾、鷹雄とも書く。

として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は、日本のすべて(一)の景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずと、雖も秀麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰(二)、高雄の山々波濤の如く、





(一)天香山ともいふ。  
(二)耳成山とも書く。

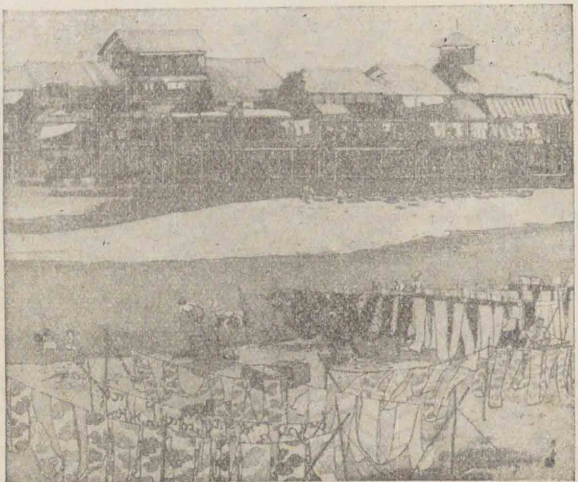
宮柱太知る

(三)大堰川の下流、桂の渡から下流をいふ。  
(四)嵐山の下を過ぎて桂川は賀茂川に合する。  
(五)淀川。

茫洋  
浩蕩

西に稍隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の緑、色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり、一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日、夕日に照映ゆる色の千變萬化なるぞおもしろき。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は大和の畝傍、香山、耳無の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松引く樂みなど、いづれ劣らぬ所がら、南に稍隔りて男山これに對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。  
京の東端には賀茂川の流、紮の河合に高野の支流を集めて南に珠を碎き去り、西に桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しくまた南に向かふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。  
茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與

JAlkali



賀茂川 (松宮芳年筆)

ふるもの少しと雖も、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんば、あらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、晒す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、捨てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益清きな



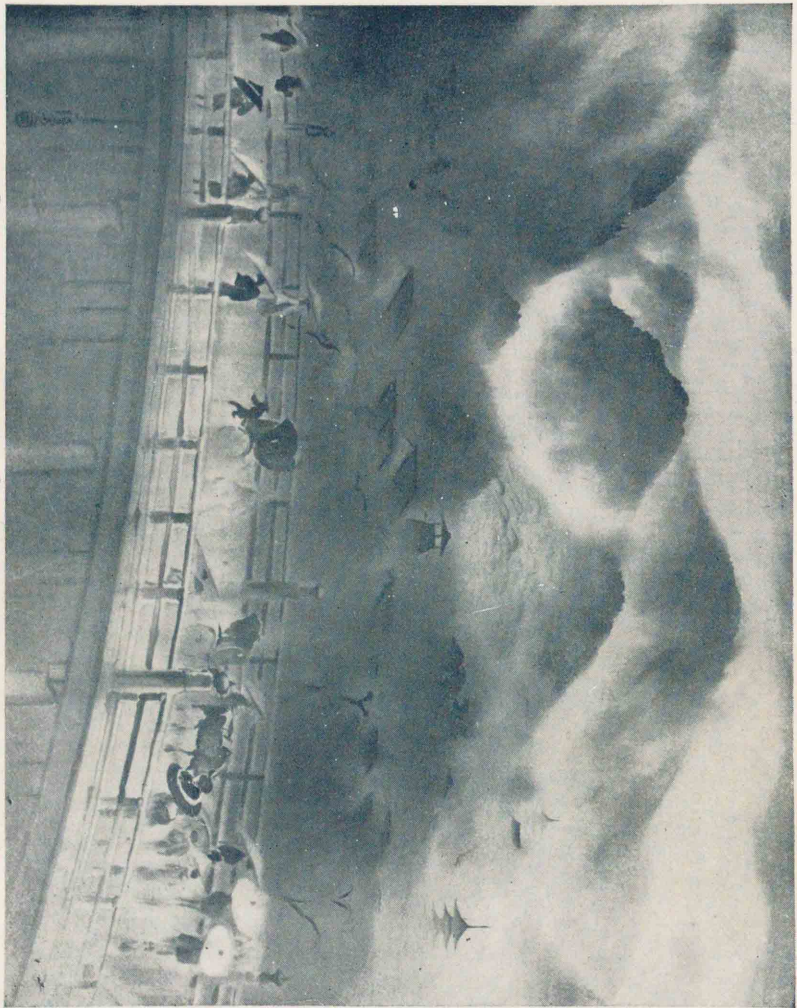
山紫水明

り。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひあらはせり。何所の山水も、日中よりは朝夕の姿態のおもしろきは、水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土地濕潤に、水分を含むことに濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さと吹き浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重り重りて海を覆ふ。浪の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。浪か、雷か、世界はただ一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。此の如き壯絶なる景は、我が數年滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりしところなり。されど下京より吉田に通ひたる朝な朝なの景色は、今もなほ彷彿として眼前にあるを覺ゆ。引きわたす霞に、三條の大橋の

黒雲魔の如し

(一)京都市三條以南をいふ。下京區。  
(二)上京區。



三條大橋

近藤浩一 寫



(一)「蒲團着て寝  
たる姿や東  
山(嵐雪)  
あるかなきか  
の夢

山河襟帯

五 平安京

擬寶珠の、一つ一つ彼方へ彼方へと淡くなりて、向ふに寝たる東山  
は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる  
松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝



花賣 (前田青田筆)

霧を漏れくる。時雨の景色の  
またよその國には見られぬ  
さまよ。愛宕の峰を覆ひて白  
く光りたる薄布の、さては時  
雨と思ふうちに、はらはらと  
面を撲つ。あはやと驚きもは  
てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも晴れて、今は山  
科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帯の  
平安京の特色なり。



京の雨〔自修文〕

荻原井泉水

雨の美しさ。雨の趣。——それを私は京都に来てからほんたうに味はひ得たやうに思ふ。

春の雨の降るといふよりも、靜かに濡す、地上を潤ほすといふ感じも好い。風が少い所なので、雨はしとしととしづくするやうに落ちる。賀茂川べりの柳長い橋、古風な家構などが、皆雨を得て繪畫的に生きる。夏の雨のうちそ、ぎ烟らし、地の底まで浸すといふ感じも好い。若葉の緑もその雨を得て愈濃くなる。青い繪の具が流れさうにも見える。竹林からはその雨に依つて筍がぐんぐんと伸びる。墨の垂れるやうな雨空に道が薄白くあつて、竹林のじんだやうな緑の前を、おつとりとした牛が、濡れて牽かれてくる。全く紙本水墨の境地である。

秋の終から冬の初に降る時雨の味はまたおもしろい。古人は時雨をほろほろと降るといつてゐるが、それは全くほろほろと軽いものがこぼれ落ちるやうな感じなのである。殊に竹の葉に觸れると軽く鳴るその音を聞いて、お、時雨

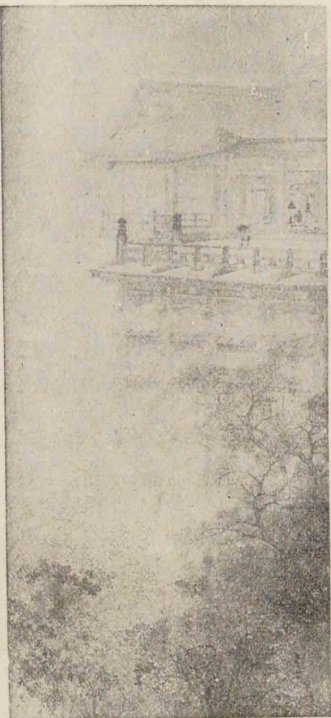
紙本水墨  
紙にかいたす  
みゑ。

上梓  
書物を出版す  
ること

「春ともならな  
いのに鶯が竹  
林に來始めて  
かはいさうに  
時雨に濡れて  
ゐることよの  
意。

(二)俳諧時記。  
四卷。瀧澤馬  
琴の著。享和  
元年(二四六  
一年)の自序  
がある。

迂潤  
元來廻り遠い  
意味であるが、  
俗に「まわけ」  
といふやうな  
意味に通用さ  
れてゐる。



雨の清水(上原古年筆)

が來たのかと耳を立てるほどもなく止んで、暫くたつと再びほろほろとその音がする。庭の面を見ると、石がしつとりと濡されてゐて、そこにまた薄い日がさしてゐる。昔の俳人は非常にこの雨を愛でたもので、芭蕉一門の選集として京都から上梓した猿蓑集には、その巻頭に時雨の句が並べてあり、京都に住んでゐた蕪村にも、時雨の句は特に多い。

鶯の竹に來そめて

時雨けり 蕪村

夏の鶯を老鶯といひ

冬の鶯を笹子といふと歳

時記にはあるが、實際は冬の初にやはり老いた鶯が鳴くものだといふことも、迂潤ながらこの頃私は知つたのである。

あれ聞くと時雨くる夜の鐘の聲

其角

京都は寺が多いだけあつて、鐘の聲も到る所で聞かれる 知恩院の鐘、清水



(一)方廣寺のこと。  
天台宗。京都  
市洛東

(二)臨濟宗東福寺  
派の大本山。  
京都五山の  
一。京都市洛東。

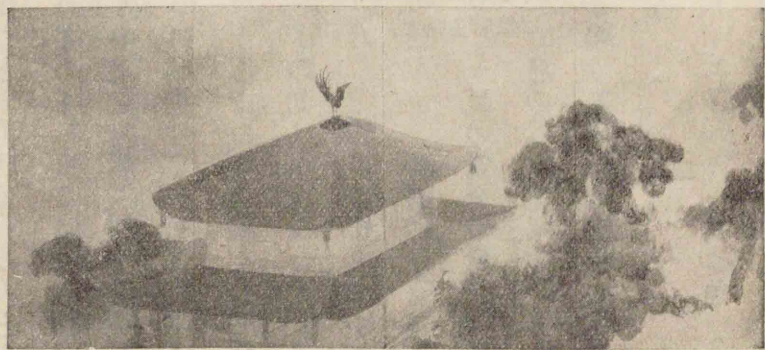
氣流  
空氣のながれ  
動くこと。

盆地  
山や窪地で圍  
まれた平な地

漫然  
深くも考へな  
いと。たゞばつ

寺の鐘、大佛の鐘、東福寺の鐘、それぞれにそ  
の音色が違ふのである。

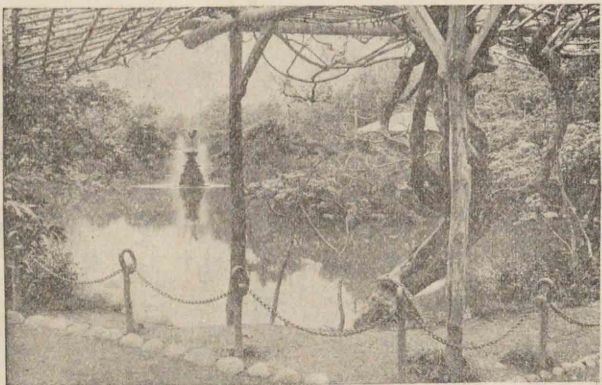
地文學者の話に依ると、時雨といふものは、  
小さく凝集した雨雲が、ほつと解けて消えたり、  
またできたりする時々<sup>(一)</sup>に起る現象なので、氣流  
の關係から或一局所に起るが、それは四周に山  
があつて盆地をなし、水蒸氣の多い、且つ冷易  
い所に限るといふことである。その點で京都は  
十分時雨の名所とするに足りる。ほんたうの時  
雨の味は、京都のやうな所でなければわからぬ  
といつてもよい。東京や、その他の平野なり海  
なりに近い所で、冬の初に降る雨を漫然と時雨  
などといふのは、歳時記の摸倣に過ぎないだら  
うと思ふ。



北山時雨 (上田萬秋筆)

## 六 東洋の秋

芥川龍之介



日比谷公園

自分は日比谷公園を歩いてゐた。  
空には薄雲が重り合つて、地平に近い  
樹々の上だけ、僅かにほの青い色を残し  
てゐる。そのせい<sup>(一)</sup>か、秋の木の間の路はま  
だ夕暮が來ないうちに、砂も、石も、枯草も  
しつとりと濡れてゐるらしい。いや、路の  
右左に枝を差交はした篠懸にも、露に洗  
はれたやうな薄明が、やはり黄色い葉の  
一枚毎に微かな陰影を交へながら、懶げ  
に漂つてゐるのである。

自分は籐の杖を小脇にして、火の消えた葉巻をくはへながら、別



にどこへ行かうといふあてもなく、寂しい散歩を續けてゐた。  
 そのうそ寒い路の上には、自分以外に誰も歩いてゐない。路をさし挟んだ篠懸も、ひっそりと黄色い葉を垂らしてゐる。ほのかに霧のかゝつてゐる。行手の樹々の間からは、たゞ噴水のしぶく音が、百年の昔も變らないやうに、小止みないさゞめきを送つてくる。その上げふはどういふわけか、公園の外の町の音も、まるで風の落ちた海のやうに、蕭條とした木立の向ふに静まりかへつてしまつたらしい。——と思ふと、



一のそ (筆雪關本橋) 得拾山寒

知の境  
 海の  
 光の

鋭い鶴の聲がしめやかな噴水の響を壓して遠い林の奥の池から、一二度高く空へ揚つた。  
 そのうちに次第に黄昏が近づいて来た。自分の行く路の右左には、苔の匂や落葉の匂が、濕つた土の匂と一緒に、しつとりと冷たく動いてゐる。その中にうす甘い匂のするのは、人知れず木の間に腐つて行く花や果物の薫かも知れない。と思へば、路端の水溜りの中にも、誰が摘んで捨てたのか、青ざめた薔薇の花が一つ、土にもまみれずに匂つてゐた。



二のそ (筆雪關本橋) 得拾山寒



自分は思はず足を止めた。  
 自分の行手には、二人の男が靜かに竹箒を動かしながら、路上に  
 明るく散亂れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巢のやうな髪  
 といひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破衣といひ、獸にも紛ひさうな  
 手足の爪の長さといひ、いふまでもなく二人とも、この公園を掃除  
 する人夫の類とは思はれないのみならず、更に不思議なことには、  
 自分が立つて見てゐる間に、どこから飛んで來た鳥が二三羽、さ  
 つと大きな輪を描くと、默然と箒を使つてゐる二人の肩や頭の上  
 へ、先を争つて舞ひさがつた。が、二人は依然として、砂上に秋を撒散  
 らした篠懸の落葉を掃いてゐる。自分は徐に踵を返して、火の消え  
 た葉卷をくはへながら、寂しい篠懸の間の路をもと來た方へ歩き  
 だした。  
 が、自分の心の中には、いつか靜かな悦がしつとりと薄明るく溢

(一)寒山は唐の隱  
 者、拾得は同  
 代の奇僧で、  
 國清寺の豐干  
 に拾ひ養はれ、  
 因つて拾得と  
 いつた。二人  
 は無二の友と  
 ある。

れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべき自分の迷たる  
 に過ぎない。(一)寒山拾得は生きてゐる。永劫の流轉を閑しながらも、今  
 日なほこの公園の篠懸の落葉を搔いてゐる。あの二人が生きてゐ  
 る限り、懐かしい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去  
 つてゐないのに違ひない。

自分は篠の杖を小脇にしたまゝ、氣軽く口笛を吹鳴らして、篠懸  
 の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。寒山拾得は生き  
 てゐる。と口のうちに獨り呟きながら。  
 — 沙羅の花

### 七 流泉啄木

今は昔、源博雅の朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克  
 明親王と申す人の子なり。萬づのことに勝れてありける中にも、管  
 絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえ

管絃の道



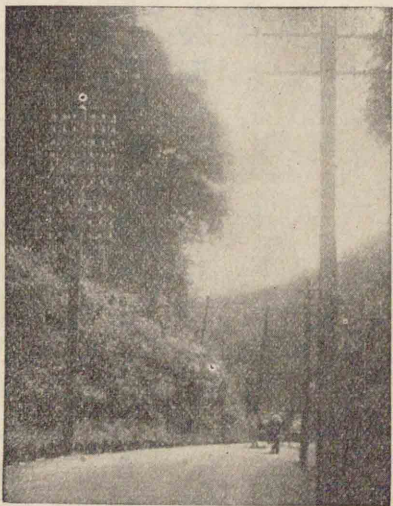
(第六十二代) 殿上人

雑色

ならず吹きけり。この人村上(一)の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人の盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

然る間、この博雅この道をあながちに好みて求めけるに、か

の逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸にいはせけるやうなど思ひかけぬ所には住むぞ。京



逢坂山

あながちに好む

に來ても住めかし」と盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

よの中はとてまかくても過してん

宮もわら屋もはてしなれば



博雅の朝臣

と使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、愈そのみやびの心に感じ、思ふやう、我あながちにこの道を好むによりて、この盲に會はんと思ふ心深し。されどこの盲

の命いつまであらんも測り難し。我が命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かんと思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾くことな

かまへて



うは曇る

心をやる

すきもの

かりければ、その後三年の間、夜な夜な逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を今や弾く今や弾くと密に立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月十五日の夜、月少しうは曇りて、風少しうち吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり、逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は弾くらめ」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴らして、もの哀に思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲獨り心をやりて詠じていはく、

逢坂の關のあらしのはげしきに

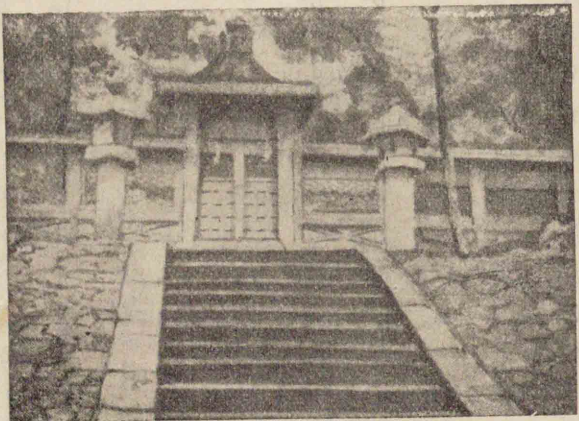
しひてぞあたる世をすごととて

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀と思ふこと限りなし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし。物語せん。」といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に在る博雅といふものこそ

かたみに

これに來たれ」といひければ盲のいはく、かく申すは誰にかおはする。」と博雅のいはく、我はしかじかの人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。」と盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉、啄木の手を聽かん」といふ、盲「故宮はかくなん弾き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、もろもろの道はたゞ此の如く好むべきなり。それ



(山坂逢)社ノ上丸蟬



に近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸  
卑しきものなりといへども、年頃宮の弾き給へる琵琶を聽きて、極  
めたる上手にてありけるなり。それが盲になりなければ、逢坂には  
ゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語  
り傳へたるとや。

— 今昔物語による —

### 八 東大寺

薄田 泣菫

月がよいので東大寺のあたりへ出かける。すくすくと大樹の立  
ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の氣が煙のやう  
に迷うてゐる。このやうな宵に、木立の下路で迷ひでもするものな  
ら、きつと鬼の落した蟲まじもの係つな蹄ひづりにかゝつて、夜一夜歩き廻つたとこ  
ろで、いつかな路標を見つけることもできなからうと思はれる。  
南大門は撞木杖をついた翁のやうに、支柱に凭たれて、その立派な  
いつかな

寶杵

體をじつと空に擡げてゐる。密迹、金剛二力士は、この靜かな宵にも  
その三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り、寶杵を揮つて、張



南大門

肘に控へてゐる。銀の滴のや  
うな月光が、盗むやうに窓に  
こぼれて、肩から脹脛むねもとにかけ  
て半身に流れる肉むらの色  
がいかにも冷たく、また美し  
い。じつと見てゐると、儼しい  
顔のどこやらに、追懷の「夢心  
地」が漂うて、靜かにと息をつ

居丈高

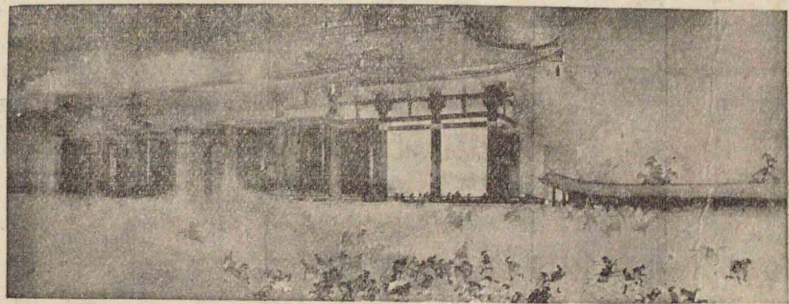
くかのやうに思はれる。しかし、それも一瞬の間で、再び寶杵を揮つ  
て教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。  
佛殿の中門は閉されてゐる。百間にも届かうといふ長い廻廊は、



屈託さう  
燈明瞬く

鳥の翼のやうに左右に開いて、果は見えずな  
る。門の透間からかいま見ると、金堂の扉は靜  
かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてあ  
る。堂守の僧でもあることか、どこやらにさゝ  
やくやうな響がして、それもやがて消えてし  
まふと、あたりはまたもとの靜寂に返る。天人  
の足音も聞えさうな宵である。このやうな靜  
かな夜を、じつと佛殿の闇に閉籠つて、毘廬舍  
那佛は何を觀じてゐられるであらう。永祿の  
昔佛殿が炎上してから後百三十餘の夏冬を、  
佛はいつも露宿でいらせられたといふ。その  
頃は夢のやうな月夜の靜けさに、醉心地にな  
るまでも見とれてゐられたであらう。どここと

(一)永祿十年松永  
久秀の兵火に  
罹つた。



大佛炎上(平井樞仙筆)

(一)奈良縣生駒郡  
平城村の古名

法界  
閻浮の世



も知らず十六夜薔薇の匂ふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れる  
ながし目のやうな月明に濡れながら、または佐保の川瀬に衣晒す  
女の唄も眠つた眞夜中秋篠のあ  
たりに沈み入る月影を眺めて、ひ  
大とり法界の久遠を想ひ、閻浮の世  
の流轉を觀ぜられた姿は、どれほ  
ど美しく、また偉大なものであつ  
たか。今宵それ等の追懷に、しみじ  
みと寂莫の盃を味はうてゐられ

佛

るかも知れぬ。

あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。寂びれた舊都の宵はもう  
夜半過の心持がする。



類火  
(一)後醍醐天皇  
卿相雲客

(二)藤原藤房。忠臣。

(三)藤原季房。藤房の弟。

十善の天子  
田夫野人

(四)河内國(大阪府)南河内郡赤坂村。金剛山の北麓。心ばかりをつくす

### 九 松の下露

さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、(一)主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客皆徒跣からだしなる體にて、何所を指すともなく、足にまかせて落行き給ふ。この人々初め一二町がほとこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲ここかしこに聞えければ、次第に別々になりて、後にはたゞ藤房、季房(二)二人より外は、主上の御手を引きまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、(三)そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂(四)の城へと御心ばかりをつくされけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二歩には立ちどまり、晝は道のそば

おろそか

羅敷

(一)山城國(京都府)綴喜郡多賀村と井出村との中間。

なる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅敷の御袖をほしあへずとかくして夜晝三日に、山城の多賀郷なる有王山(一)



笠置山(田南岳瑯筆)

の麓まで落ちて  
させ給ひてけり  
藤房

も、季房も、三日まで口中の食を断ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと思し召して、木陰に立寄せ給ひたるに、下



(一)同相樂郡。山城、大和の國境。木津川の南岸に聳える。

露のはらはらと御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠れがもなし

藤房卿涙をおさへて、

いかにせん頼むかげとて立寄れば

なほ袖ぬらす松のしたつゆ

山城の國の住人深須入道、松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峰々残る所なく搜しける間、皇居隠れなく尋ね出されさせ給ふ。主上誠に恐しげなる御氣色にて、汝等心あるものならば天恩を戴いて私の榮華を期せよ。と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれこの君を隠し奉りて義兵を擧げばや。と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏易くして道の成難からんことをはかつても、だしけるこそうたて

もだしけるこそうたてけれ

網代

(一)大和國(奈良縣)山邊郡朝和村

けれ。俄のことにて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け寄せまゐらせて、まづ南都の内山へ入れ奉る。その體たゞ殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞き

これを見る人毎に、袖を濡さず

といふことなかりけり。

この時ここかしこにて生捕

られ給ひける人々都合六十一

人、その所從眷屬どもに至るま

では數ふるに違あらず。或は籠



笠置山行宮址

輿に召させられ、或は傳馬に乗せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女ちまたに立並んで、人目をも憚らず泣悲しむ。あさましかりし有様なり。

十月二日六波羅の北方常葉駿河守範貞三千餘騎にて路を警護



(一)天台宗に屬してある。藤原道長の山莊であつた。  
(二)足利高氏と大佛貞直。

繼體の君

仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將、京へは入らずして、すぐに宇治へ参り向かひて龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給はりて、持明院へ参らすべき由を奏聞す。主上、藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握るものありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして、新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に棄ておき奉りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも我が國の守とならせ給はぬことあらじ。寶劍は武家のともがら若し天罰を顧ずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はん爲に、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。と仰せられければ、東使兩人も六波羅も、言葉なくして退出す。

袞衣

天上の五衰人間の一炊

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成しまゐらせんとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、強ひて仰せ出される間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸にことかはりて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿、傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上りて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、きのふは紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の装をつくるひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の厳しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂み盡きて悲み來る。天上の五衰人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺ゆる。

— 太平記 —



一〇 懷古

島崎藤村

かんつどひ

天の河原にやほよろづ、  
ちよろづ神のかんつどひ、

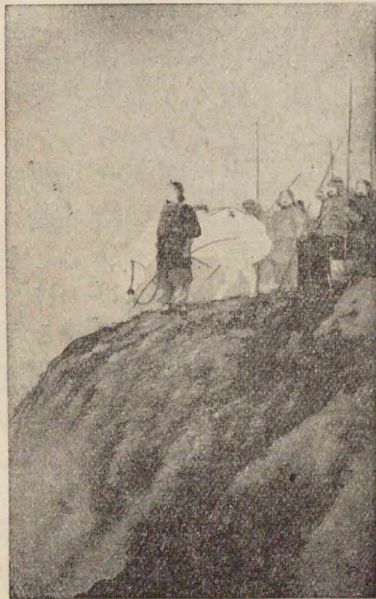
集ひいませし天地の  
初の時を誰か知る。

それ大神の天雲の

八重かきわけて行く

如く、

野の鳥ぞ啼く東路の  
碓氷の山に登りゆき、



(筆風草野長)やほまつあ

現氷

(一)第十二代景行  
天皇の皇子日  
本武尊

(二)持統天皇が大  
和國(奈良縣)  
高市郡雷村雷  
丘に行幸され  
た時柿本人麿  
の詠んだ歌に  
「大君は神に  
しませば天雲  
のほりせるか  
も」(萬葉集)

(三)「さ、波や志  
賀の都は荒れ  
にしながらむか  
さくらかな」  
平忠  
度

日は照らせども影どなき  
吾が妻はやとこひなきて、  
熱き涙をそゝぎてし  
尊の夢は跡もなし。

(二)大和の國の高市の

雷山に御幸して、

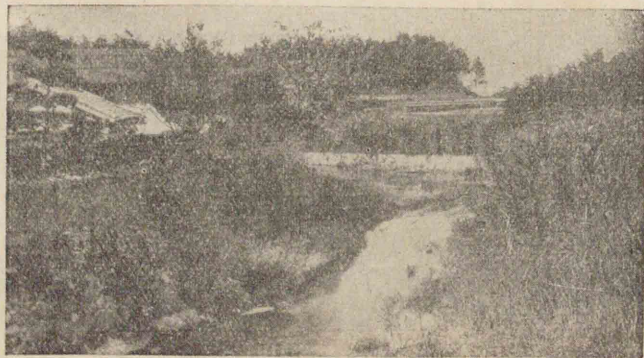
天雲のへにいほりせる

御輦の響今いづこ。

目をめぐらせばさゝ波や

志賀の都はあれにしと、

むかしを思ふ歌人の



丘 雷



(一) 高き屋にのぼりて見れば  
煙たち、民のかまどは今ぞ富みぬる。  
(藤原時平)

澄める怨をなにかせん。

春は霞める高臺(一) たかのに

のぼりて見ればけぶり立つ

民のかまどのながめさへ

消えてあとなき雲に入る。

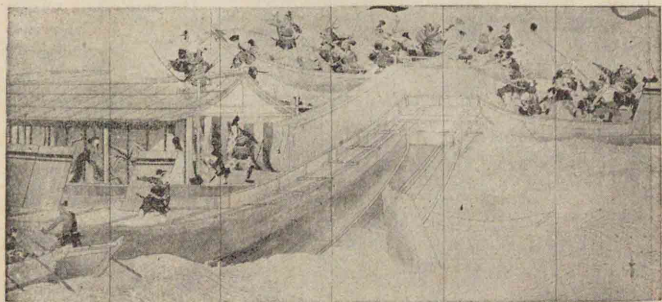
冬はしぐるゝ九重の

大宮内のともしびや

さむきは雪に凍る夜の

龍のころもは色もなし。

むかしは速き船いくさ、



一のそ (筆 雅 水 川 山) 戦 船

人の血汐の流るとも、  
今はむなしきわたつみの、  
漫々としてきはみなし。

むかしはひろき關原、

つるぎに夢をあらそへど、

今は寂しき草のみぞ、

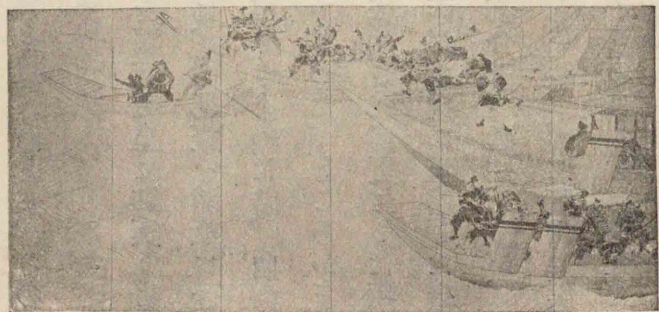
茫々としてはてもなき。

われ今秋の野にいでて、

興山高くのぼり行き

都のかたを眺むれば、

あゝあゝ熱きなみだかな。



二のそ (筆 雅 永 川 山) 戦 船

藤村詩集

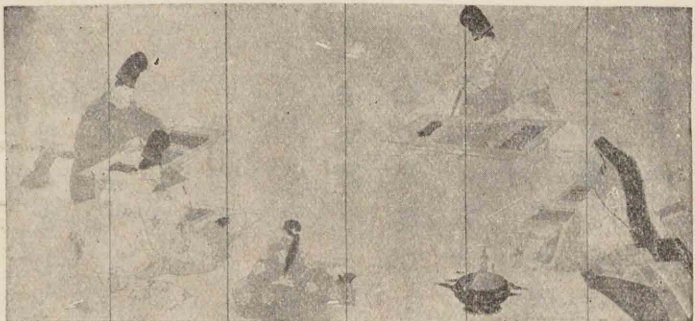


大宮人と武士〔自修文〕

萩野由之

雨を歴史上から見ると、種々おもしろい事があるもので、雨を恐れると恐れぬとが、その時代の世態人情を表してゐるやうに思ふ。

白河天皇が御位を堀河天皇に御譲りになつた後、佛法御信仰の餘りに、一切經を紺紙に金泥でお寫させになつて、それができ上つた時、白河の法勝寺で供養をされる豫定であつた。ところがその日になつて大雨である爲に延期され、更にまた期日を定めたが、この時もまた雨だ。次に延期した時もまた雨で、行幸ができない。都合三度延期したが、もはやこの上延期はできないといつて、四度目に供養を行はせられたが、あいにくその日もまた雨天であつた。そこで白河法皇は大いに逆鱗びきりんましまして、「怪しからぬ雨ぢや。速に監獄へ送れ。」



寫 經 棚田曉山(筆)

(一)第七十二代。一切經。佛典の總名。大藏經ともいふ。  
(二)京都賀茂川の東部白川に沿ふ地域の稱。  
逆鱗。天子のお憤りになるのにいふ。龍には喉に逆鱗があつて、人のこれを取らうとすれば怒つて殺し主にもまた逆鱗があるとの文から出たものか。

と仰せられて、その雨を器物に入れて、獄舎へ送られたといふことで、世にこれを雨禁獄といひ傳へてゐる。雨を禁獄したところで何の効もあるまいが、かくまで逆鱗あそばされたのを見ても、御外出の時、雨がいかに禁物であつたかが知られる。

外出の時には晴天がよいといふのは、普通の人情であるが、昔の人の雨天嫌はまた特別であつたので、今の人の想像もできぬほど恐れたものである。今一つのおもしろい例を次に擧げよう。

建久六年の三月、奈良に大佛殿の供養があつた。これは聖武天皇の御建立あそばされた大佛殿が、先年平重衡の南都征伐の時に兵火にかゝつて焼失して、大佛の首も焼落ちたといふ驢(一)。その後再建もできなかつたのを、後鳥羽天皇の思召、また源頼朝の寄附や、俊乗坊重源などの勸化で、やつとこのたび再建落成した。これによつて天皇も行幸あり、頼朝も鎌倉から上つて来て、供養に参列したのである。然るところこの供養の日が大風雨であつて、参列の公卿、百官、さては諸寺の僧侶たちも、全く困りきつてゐた。

(一)第四十五代。治承四年十二月。  
(二)清盛の子。壽永三年一ノ谷の戦に義經の軍に捕へられ、後、文治元年木津川で斬られた。年三十。  
(三)第八十二代。法然上人の高弟。元久二年(二八六五年)歿。  
(四)勸化。信者から寄附たつること。



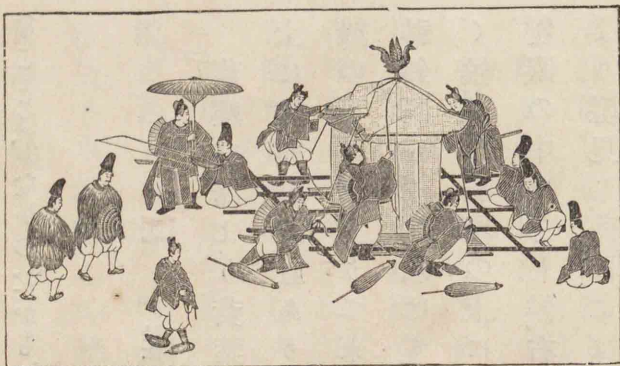
(一)天台座主、文  
を好み、和歌  
に長じた。慈  
鎮と諡する。嘉  
祥元年(一  
一八五年)寂  
年七十九。

矢石の間  
合戦の中、

然るに頼朝護衛の武士たちは、その大雨の中をびくともせず、列を正して密集してゐて、どこを雨が降るかといふ面魂、平氣なものであつた。そこで京の人たちは驚くまいことか、時の名僧慈圓僧正などは、その事を記録に書留めて武士たちは皆雨に濡れることを何とも思はぬらしい。と不思議さうに記してゐる。兵士が雨中を歩くことや、立つてゐることが、何の不思議であらう。殊に鎌倉武士は、當時日本一のやうにいはれた武勇の士で、矢石の間を潜つたものだ。雨中に立つくらゐは何でもない、當然な話ではないか。然るに京都人は此の如く驚く、これは何故であらう。

この疑問を解決するには、種々な方面から説明する必要があるが、まづいつて見れば、當時の貴顯、紳士の服裝が、第一、雨に堪へないものである。裁縫のし方は暫く別としても、その地質は大抵糊で貼つて、艶を出したものが多から、一度雨に逢へば、忽ちだらりとする。折目正しい禮服も、忽ち見る影がなくなる。またその染色も、水に濡れると忽ち色がさめもし、他へ移りもするから堪らない。朝廷の大小禮は、大極殿や紫宸殿で行はれたが、その時、天皇

朝儀  
朝廷で行はれ  
る儀式。



雨儀の鳳輦

は殿上に、文武百官は階下の廣庭ひろにわに列立する。廣庭は青天井で、日覆もなければ雨覆もないから、雨の日には衣冠いこうは形なしになる。それゆゑ略式で濟ませる。こんな事情が續いて、次第に晴天でも略式を用ひ、終には朝儀も舉行しないやうになつたのである。

しかし、これはたゞ服裝の一例を挙げたに過ぎないが、かゝる習慣が代々續いて來て雨に臆するから、身體も虚弱になれば、氣性も柔和になる。隨つて活動することなどは、思ひも寄らぬやうになる。上流社會がすでにこの通りであるから、上に倣ふ下で、下級の人民もだんだん勤勉ができなくなる。國は衰へるのみである。

雨を恐れるところに亡國の氣分が漂ひ、雨の降るのも知らぬ風にびくともしないところに、新興の活氣が漲つてゐるではないか。これ即ち平安時代の末に



(一) 萩野由之の史話を集めた書

朝權が日々衰へて、武家政治が新たに興つた所以である。若し殿上の公達も雨を恐れないで、活潑に活動してゐたならば、政治の實權を武士に握られるやうなことは、なかつたかも知れないのである。

(一) 讀史の趣味

一 碓氷だより

徳富健次郎

(二) 長野縣北佐久郡。鐵道驛の在る新輕井澤に對して舊來の宿驛をいふ。黄葉疎枝 風霜に飽く 望を凝らす

(一) 舊輕井澤より黄葉疎枝の山路二十六町許上れば、則ち碓氷の頂上に候。熊野神社あり。神社を護して十五六軒。神社は街道より幾十級の石段を上りて東南に面し、神殿、拜殿、神樂殿幾年の風霜に飽き、神鈴語らず、鳥歌はず、寂々たる社内の風物いとど神寂びて、ゆかし候。試に石段の上に傘を杖ついて望を凝らし候へば、廣漠の景は雙眼の中に歸し候。右手には輕井澤の谷一圓、黄落せる木の枝の間より隱見し、前面には妙義の頭を見越して、甲斐、秩父の連山と面々相對し、轉じて左手の方は榛名、赤城の諸峰東北に流れて、手を伸べ

(一) 群馬縣高崎市

(二) 上野、下野の二國

白銀の帯

(三) 碓氷郡

て背を撫すべきが如く、足下には碓氷一郷の稻田黄河流るゝが如く、丘陵に従ひ迂曲して、高崎に至つて茫茫たる平野の海にうち出し、眼を放てば海よりも廣き二毛武總の野、杳々天末に連なり、黄なるものは田、黒きものは村、粉壁の白く輝ける、川流の白銀の帯を曳ける、心は望むに隨つて濶く、坐に人生悠々の感を催すものこれあり、千載の前曾てこの嶺上に頭を回らして吾妻の空を眺め、亡き姫を懐かしみ給ひし小碓の尊の昔も、今更にしのばれ候。絶頂より十町許も下り候へば、道の三叉をなせる所に、霧積温泉道、従是一里……町と記せし路標の、たゞ一本寂しげに薄の中に佇み居り申候。概して絶頂より半道餘りの間は薄と松との世界にて、紅葉は殆どこれなく候。この薄の山を過ぎ候ふをりふし、淺間の方俄にかき曇り、麓は日影明らかにならぬが、山は一點二點の時雨はらはらと帽に落ち申候。



しぐるゝや薄分けゆく山三里

などうち吟じて急ぎ候ふほどに、満山の時雨薄に落ちて、恰も人のものいふやうにござ候。空山聲なく、たゞ時雨の枯薄に落つる音と、時に木枯の一陣樹間にわたりて、落葉さらさらと鳴るのみにこれあり、身はこれ王維畫中の人ならずば、<sup>(一)</sup>章蘇州詩中の人にや候はん。一心水の如く澄んで、何となく氣森然と改りたるやうに覺え候ふは、<sup>(二)</sup>孟郊の所謂山中人自正なるものにも候ふべきか。路は落葉多き所に入つて、時雨益音高く相成候。

傘を傾け道を急ぎつゝ、獨り空想に耽りて歩み候ふほどに、ふと心づけば、時雨はいつか過ぎて、身はすでに紅葉世界に落居り申候。遊蹤狭き小生のこととて、紅葉といへば、<sup>(三)</sup>たかが京都三尾の秋を見たるばかりの眼は、今一驚を喫し候。何がなし、我が立つ岨を中心として、碓氷の東面悉く錦に候。左方の山谷を見れば、たゞこれ一面

<sup>(一)</sup>唐の詩人。名は應物。

<sup>(二)</sup>中唐の詩人。字は東野。

森然

遊蹤

<sup>(三)</sup>高尾、梅尾、横尾、共に京都郊外の紅葉の勝地。

一驚を喫す  
何がなし

の錦。右の山谷を見れば、またこれたゞ一面の錦。満山の錦。満山の焰。五色の焰。峰といはず、谷ともいはず、たゞ燃えに燃立つ美觀、殆ど壯觀、小生も覺えず嗚呼と叫び申候。その黄色、淡黄色、褐色、黄褐色、その他思ふべくしていふべからず、見るべくして思ふべからざる、ありとあらゆる色美しき錦の地に、遙か彼方の岩の上に、朱の如き黄紅の楓一樹、此方の谷の底に、鮮血の如き淺紅の枝一枝、かしこの松の隣に、夕焼の色よりも濃き深紅の兩三本、さながら一山を照らす炬火の如く、萬段の錦の色を一時に呼覺し來るを見たる時には、小生はたゞ詩才のなきを恨み候。况や淺間時雨は全山に水洒ぎて去り、深碧の空は明鏡の如く上より照らし、今正に碓氷の西南に廻り來りし午日は、億萬條の金光線を、惜しげもなく山に谷に漲らし下し候ふをや。

この峰に山人の棲みわぶる家一つ二つこれあり、小生その家の



(一)唐の詩人白樂天。その有名な詩の句「林間に酒を煖めて紅葉を焚く。」

(二)碓氷郡。碓氷峠の東麓。

(三)正平二年八月の河内國(大阪府)藤井寺合戦。同じく十一月の攝津國(大阪府)住吉阿部野の合戦。  
(四)足利勢。  
(五)足利直義氏。  
(六)同直義。

前を過ぎ候ふ時は、主人は何か野稻の收納のやうなる事いたし居り候。紅葉が好いね。といへば、は、紅葉かね。と申候。彼等は紅葉に包まれて生活するなれば、何の珍しげもなく、恐らくたゞ一度の歎美の辭を與ふることなく、白氏の風流を知らで、紅葉を焚きて茶を沸かし、朝夕の山の上り下りにも、あたら錦を踏みにじり、かくて年々紅葉を迎へ、紅葉を送るにぞあらんずらん。

横川より一里と申す所に、力餅を賣る茶店これあり。同所に到れば碓氷の右側を通る舊道、中央を通る汽車道、左側を通る新道、皆一所に落合ひ、碓氷三里、紅葉の觀はこの所に終り候。——青蘆集——

### 一二 最後の參内

さても今年兩度の合戦に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の

周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢などを向けては、かなふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘個國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀、八幡に着きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、厄弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安めまゐらせ候ひし後、天下ほどなく亂れて、逆臣西國より攻上り候ふ間、危きを見て命を致すところ、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝津湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戦の場へは伴なはで河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に即けまゐらせよ。と申し置きて死にて候。然るに正行、正時すでに

(一)藤原氏。吉野朝の忠臣。男山で戦死した。  
(二)後醍醐天皇。



改訂帝國新讀本 卷六

六〇

有待の身

壯年に及び候ひぬ。このたびわれと手を碎き合戦仕り候はずば、かつは亡父の申しし遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき誇に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕ること候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候ふ間、このたび師直、師泰に驅けあひ、身命をつくし合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候ふか、正行正時が首を彼等に取りられ候ふか、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神

傳奏

〔後村上天皇〕

股肱



妙なり。大敵今勢をつくして向かふなれば、今度の合戦天下の安否

なりと思ひ定めて退出す。

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四

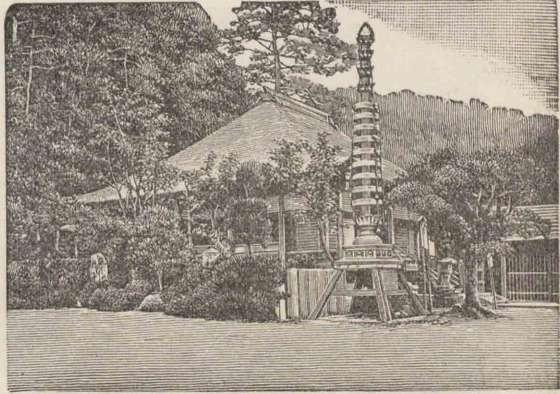
楠木正行 (松本楓湖筆)

たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とするところなれば、今度の合戦手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、たゞこれを最後の參内



過去帳

遊修



(山 野 吉 在)

吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向かひける。

— 太平記 —

### 一三 趣味の生活

小林 一郎

郎子息二人楠木將監しゅうげん以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参つて、今度の軍難儀ならば意討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて、その奥

堂に、  
かへらじとかねて思へば梓弓

なき敷にいる名をぞとむる

と一首の歌を書留め、逆修の爲と思しくて、各鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日

(一)坂上是則の作。  
拾遺集にある。  
山がつ

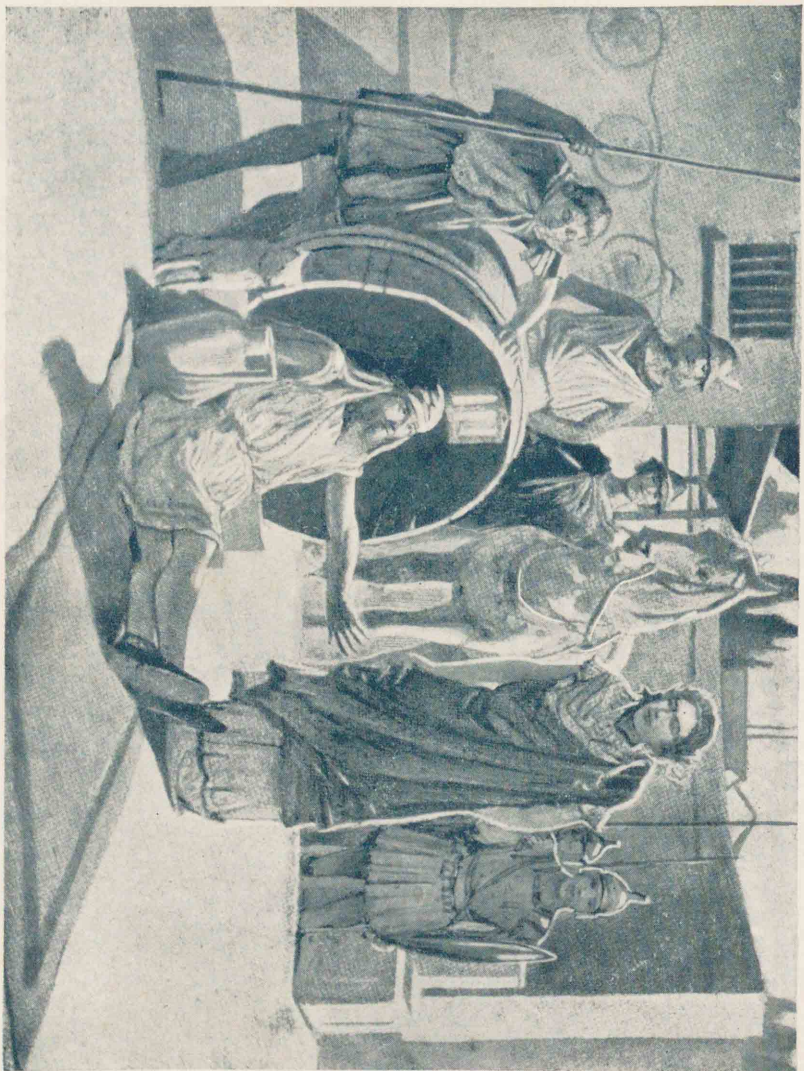
昔、藤原氏が世に時めいて、詩歌管絃の遊に耽り、その一門の榮華に誇つて、平民をさながら塵芥の如くに視て居た時に、山がつと人はいへどもほとゝぎすまづ初聲はわれのみぞきく。と詠じた歌人があつた。杜鵑を人より先に聞くか後で聞くかは、實はどうでもよいことで、夜をまもり明かして初音を聞かうと騒いだ風流家がその頃多かつたのは、今から考へて見ると、ばからしいことであるが、眞に杜鵑の一聲に限りあはれを感じる人があるならば、その人はこの世間的の區別などを全く忘れて居たはずである。自分は京に居るのか田舎に居るのか、殿上人であるのか山賤であるのか、それ等の別ちを一切心に置かないで、始めて杜鵑の一聲に深い趣を感じる事ができるわけである。嘗に杜鵑ばかりでなく、趣味の上から物事を見る場合には、利害得失を離れきると共に、地位の上下とか勢力の強弱とかいふことを、全く離れてしまふのである。



Diogenes,  
西曆前三二四  
年歿、年八十  
九。

慇懃

ギリシャの賢人、<sup>(1)</sup>ディオゲネスは、定まつた家といふものはなく、ただ一つの大きな桶をもつて居た。夜はこの中に眠り、晝は桶をころがしながら、自由にどこへでも行つた。そして行暮れた所で、また桶の中で眠つた。或時、アレクサンドル大王がその賢名を聞いて、わざわざ訪ねて行つた。王は幼い時からアリストテレスを師として學問しただけに、學者の貴いことを知つて居たのである。王が多くに従者を連れて訪ねて行つた時に、ディオゲネスは例の桶を側に置いて、その背を日に曝しながら、獨り冥想に耽つて居た。王はこれに近づいて、慇懃にその徳を稱へ、「何なりとも希望のことがあるならばいつてくれ。」といつた。哲人はその時王に向かつて、「王に願ひたいことがたゞ一つある。御許を得るならば、大いなる幸である。」といつた。王はこれを聞いて、「それは是非いつてもらひたい。君のやうな賢人の爲に力を致すことは、自分の悦ぶところである。」といつたところ



ディオゲネスとアレクサンドル大王



卓犖不羈

が、哲人の希望として語り出したことは、せつかく日の光に浴して居るのを、多勢來た爲に蔭になつては迷惑である。自分の希望は、王が疾くここを立去つて、累を自分に及さぬことである。といふのであつた。王は餘儀なく哲人の側を立去つたが、従者の一人を顧て、余がアレクサンドルでないとしたら、どうかデオゲネスでありたい。と語つたといふことである。この話は、卓犖不羈な哲人デオゲネスの人となり能く表すと共に、アレクサンドル王がたゞ一片の武骨な王者でなかつたことを知るべき佳話として、語り傳へられて居る。しかし、余はアレクサンドル王が、まだ多くその王者たり征服者たる地位に囚はれて居たことを、王の爲に惜しまざるを得ないのである。

この時に、若し王がその多くの従者を遠ざけて、獨りデオゲネスと並んで、日に曝されながら長閑に語り合つたなら、それは王の生



三好長慶の傳記を嗜む武士の風流

足利時代の武將、永祿七年(二二四年)歿、年四十三

涯の歴史の上にいかに多くの精彩を添へたことであらう。我が國の戦國時代に、武將の中に、その武略に於てアレクサンドル王に比ぶべきものは一人もなかつた。しかし、その身の勢力や地位を全く忘れて、見る影もない瘦法師や町人などと膝を交へて、連歌や茶の湯に興じた人は多くあつた。かのデオゲネスをして我が國に生まれしめたなら、必ずや多少の知己を、それ等武人の間にも見出し得たであらう。

三好長慶は自ら政權を握らんが爲に、主家に危害を加へた武士である。それでも、戦に勝つことと政權を握ることとより外は眼中にないといふほどの、殺風景極る男ではなかつた。彼は連歌や茶の湯を嗜んで、堪能の譽があつた。或時、人を會して連歌を催してゐた。その時

すゝきに交る葦の一むら

(一)永祿二年(二一九年)歿、年三十四

といふ句に前句をつけるのが困難であるといつて、人々うち案じて居た所へ、一人の若侍が來て、長慶に或密報をした。それは、彼の弟實休が戦死したといふ報告であつた。長慶はこれを聞いて顔色をも動かさず、やがて、かのすゝきに交るの句に、

古沼の淺き方より野となりて

と前句をつけた。かくて互に興をつくして、この一夕の會を終へ、その後、長慶は始めて實休の喪を發したといふことである。この前句は、格別に文學的に價值のあるものとは思はれぬ。これを名句として稱讚しあふやうでは、その一座の程度もほゞ察しられるが、たゞ長慶が變事の際にも心を亂さないで、一句を案ずる餘裕のあつたことは、確かに稱讚に値する。あさましい争鬪を以て充たされた彼の一生涯に於て、かゝる優雅な嗜をもつて居たことが、いかに多くの餘裕をその心に作り得たであらう。



韻事

没頭す



一の (筆秋長田磯) 會の茶大

彼はたゞ勝ちたい勝ちたいといふ野心に驅られて種々悪辣な手段を講じたのであるが、それでも、その勝ちたいといふことを忘れる暇が、確かにあつたやうである。これは、三好長慶といふ歴史上で頗る不評判な武士を、特に例に取つて見たのであるが、風流韻事に嗜のあつた武士は、いつの時代にもなかなかあつた。彼等の作つた詩や歌は、格別價值のあるものではないであらうが、しかし、それ等の武将たちが土地を切取りしようとか、武名を天下に轟かさうとかいふことにのみ没頭せず、拙いながらも詩の一首も作らうといふ嗜をもつて居たところに、大いなる價值を



二のそ (筆秋長田磯) 會の茶大

認めなければならぬ。豊太閤なども、茶の湯だの能樂だのに大いなる趣味をもつてゐた。そして自ら能を舞つて、そのできのよいのを認められて、さながら小兒のやうに無邪氣に喜んだ。その時の有様は、全く勝敗をも利害をも忘れて居たやうに見える。此の如く、多くの武将連が趣味ある生活を解し得た爲に、殺風景な戰國時代がいかほど融和されたか知れぬ。たとひ國家の紀綱が全く弛みはてて、腕力次第でいかなる事でもできる時代であらうとも、全く勢力の争と政權の奪合とのみに没頭してしまはなかつた人たちは、その所謂腕づくを極端まで運ぶ氣にはなら



なかつたわけである。主君も、家來も、能を舞ふ時には、上下の區別を立てることはできぬ。領主も、領内の人民も、茶の席に列なる時には、貴賤の別を忘れなければならぬ。趣味の上には、強弱もなく尊卑もない。若し強弱や尊卑の考をその間に持ちこめば、それだけ趣味は乏しくなる。それだけ興が失はれなければならぬ。されば自分の臣下と共に舞ひ、自分の領民と共に茶を點じて飲むことを樂しみ得る武將にして、その臣下を酷使し、その領民を壓制して、自己の權勢をのみ張らうとするはずはない。

(一)作者不詳。古今集にある。

野邊(一)近く家居しをればうぐひすの

なくなる聲はあさなあさな聞く

この鶯は我が籠に飼つたものでなく、人の家のを竊み聞くのではない。一人で聞くのも、大勢で共に聞くのも、同じことである。たゞ朝々聞くその優しい聲を愛づるのみである。この間に、利害得失の

念は少しも交らぬ。獨り鶯の聲ばかりでなく、趣味の領域に入るものは、皆此の如きものである。

かやうに、昔の日本を回顧して見ると、高い趣味をもつて居たものが少からずあつた。たとひその時代の人のすべてが、趣味に秀でたものではなくとも、譬へば、廣々とした野原の所々に花が咲いて居れば、その爲に野原の全體に優雅な氣色が満ちわたるやうなもので、これ等の人たちの感化は、自然とその周圍に及び、世間は甚だしく殺風景にならずに居られたやうである。これは確かに外國に對して誇るに足るべきことと思ふ。國民の生活に於ては、獨り思想の重んずべきのみならず、また感情の最も重んずべきことを認めねばならぬ。そして青年の人々に純潔な感情を養はせる爲には、能く過去の事實を傳へ、人々をしてそれに親しましめねばならぬ。我等の祖先が清く氣高い生活をして居たことを回想するのは、我等



(一)我が國最古の歌集。撰者に  
ついては定説  
がない。

木強漢

をして、共にこの國の愛すべきことを深く感銘せしめる所以でな  
ければならぬ。或は昔の日本が、外國から格別の壓迫も受けず、極め  
て長閑な生活を送り得られた爲に、優雅な風俗を維持することも  
できたのであるとの説を爲すものがある。それにも一應の理はあ  
るが、國民そのものの品性が元來卑しいものであつたなら、いかな  
る境遇に在らうとも、優雅な風俗がその間に發達して來ようはず  
がないではないか。萬葉集などを讀んで見ると、防人の歌といふも  
のが多く出て居て、鄙びた調ではあるが、眞情流露、頗る人を動かす  
ものがある。防人といへば、諸國から募つた壯丁の中から選出して、  
筑紫の海岸の守備に遣すもので、多くは全くの木強漢である。その  
中、かく優しい嗜のあるものが居たといふのは、いかにもゆかし  
いことでないか。

芭蕉の一生――

一四 冬の山里

(一) 太田垣蓮月

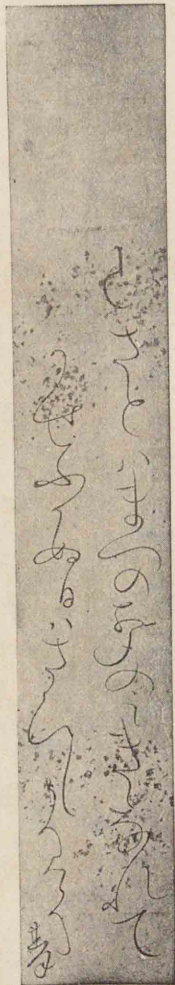
冬畑の大根の莖にしもさえて

あさとでさむし岡さきの里

山さとはま  
つきの聲の  
きよなれみ  
かせふかぬ  
日はさひし  
かりけり  
蓮月

(一)女流歌人。京  
都に住んだ。  
明治八年歿。  
年八十三。  
(二)京都市洛東  
崎。

(三)平安時代の歌  
人。越前守大  
江雅致の女。



太田垣蓮月筆蹟

よみ人しらす

神無月ふりみふらすみ定めなき

しぐれど冬のはじめなりける

(三) 和泉式部

さびしさに煙をだにも絶えじとて

柴をりくぶる冬のみま里



る月の影の散りくるこゝちして  
よる行く袖にたまる雪かな

香川景樹



蹟筆樹景川香

春道列樹

きのふといひけふと暮して飛鳥川  
ながれて早き月日なりけり

一五 日本人と自然美

世界の各民族中日本人ほど自然美を愛し、自然美を楽しむものはない。家屋、庭園の造築から首めて、一切の器具、服飾、一つとして材

月前郭公  
さやかなる  
月ゆゑたに  
もねられたぬ  
を山ほとけ  
きす鳴夜な  
りけり  
景樹  
(一)平安時代の歌  
人。延喜二十  
年。岐守に任  
ぜられた。

白地物

白地物

白地物

白地物

白地物

白地物

白地物

背景

を自然美に取らぬものはない。日本へ漫遊する外國人は、まづ街上に遊んでゐる女の子の美しい染模様を着物に驚き、次に博物館に入つては、刀劔、甲冑、古來軍人の用ひた一切の武器が、風流な花鳥を以て飾られてゐるのに感心する。仔細に觀察すれば觀察するほど、自然美に對する嗜好が、いかなる微細な點にまでも行きわたつてゐるのを歎賞する。紅葉形の煎餅、黄菊を象つた蒸菓子、これを盛る器はもとより、これを薦める部屋の欄間、襖、床の間の掛物、生花、何を見ても、外界美を縮圖したものでないのはいない。日光の東照宮を見物しては、その建築彫刻の美に驚くよりも、その輪郭、その色彩が、いかにその美しい背景と調和を保つてゐるかを驚歎するのである。日本人は自然の形を保存して、しかも一層これを美化して、自然物を愛賞する。生花の術に於ては、花卉自然の枝ぶり、幹ぶりを、自然よりも一層美化して示す。盆栽も同様である。箱庭、盆栽の配置は自



靜物

然の風光よりもその趣が更に多い。自然界の縮圖で、しかも自然美を構成してゐる急所、中心點を、巧に捕捉し得るのである。日本の繪畫が花鳥山水に勝れてゐるのはいふまでもない。西洋畫題の靜物などと日本の花鳥畫とは著しく違ふ。

心理上

日本の文學は自然美を歌ふことがその生命である。古代の和歌から近世の俳句まで、概ね自然美を歌つた歎賞の聲である。自然美を愛するの極は、人事を以てすべて自然美と結合せしめてしまつた。喜怒哀樂、すべて吾人の心理上の状態は、皆自然美をいひあらはす語句を譬喩的に用ひてゐるのである。百合花の榮ゆる。といひ、夏草のまどふ。といひ、思の煙。といひ、花の心。といひ、涙の露。といひ、袖の時雨。といふ、皆それである。單に春雨といひ、菜の花といひ、萩の花といひ、木枯といつても、日本人の心の中には、直ちにそれと聯想する幾多の人事が浮かぶのである。自然と人事とは全く融和して、一つ

人事

推移

になつてゐるのである。吾人の日常往復する手紙の文にすら、まづ時候の挨拶やら、四季の推移などを冒頭に置くのである。

一年四季の推移がいかに日本人の享樂を助けたか、いかにその注意を惹いたかといふことは、春秋の争が、古來未決の一問題であるのを見てもわかる。霞がくれに百花のとりどりに咲匂ふ春が佳いか、秋霧を分けて淡き濃き紅葉の色を尋ねる秋が佳いかといふことが、千年以上の歌人の争となつてから、歴代の國文學は思ひ思ひに、その論争に耽つてゐる。源氏物語にも春を愛づる紫の上と、秋を好く(一)中宮とは、その代表的人物として描かれてゐる。日本人ほど自然美に執着心の深いものはあるまい。

昔の人は物のあはれを知るのを理想とした。これは人情の美を知ると同時に、自然美を味はふことをいつたものらしい。人情美を知るくらゐの人は、自然美を味はふこともできるし、自然美を理解

(一)源氏物語の女主人公。

(二)秋好中宮。



數寄を凝らす

することのできる人は、人情美にも缺けぬと考へたのである。古武士の理想とした武士道も、これとは離れないで、所謂大和心といふのは、單に武勇一逼を意味するのではない。鎧の袖から刀の鏢に至るまで、風流の數寄を凝らした趣味も、この見地から理解ができる。本居宣長の「大和心の歌」も、この意味を加へなければ、了解はできないと思ふ

啄木鳥を聽く日〔自修文〕

吉田 絃 二郎

あすは東京へ歸らうと思ひながら、一日、二日と延してゐる間に、伊豆の旅も半月になつてしまつた。全く東京へは餘り歸りたくはない。

二三日前降つた初雪が、天城の北側の谿にほの白く残つてゐる。里では一寸にも足らぬ淡雪で、半日のうちに消えてしまつた。

私は毎日山に登つては天城の雲を見る。いろいろな形の、いろいろな色彩の

淡雪  
初春の頃降る雪。すぐ消える故にいふ。

岫  
山の凹み。

(John Ruskin  
イギリスの美術批評家。(西暦一八一九年—一九〇〇年)

一抹  
ひとなすり。

突兀として  
高く峻しく聳え立つて。

雲が岫を出てくる。ラスキンの雲についての論文を思ひ出すこともある。見てゐても見てゐても飽くことのないのは、芝山を出てくる雲の形であり、色である。夕暮の空の落着、雲の色は殊にいい。旅で見た夕焼の美しかつたのは、琵琶湖畔の枯葦の間から見た比叡山の空であつたが、天城にかゝる夕焼の雲を松林の間に見るのも、なかなかいい。午後の四時頃になると、松山も一鳥啼かぬ静寂にかへり、日は草山の上に落ちかゝる。間もなく天城の谿々には暮方の霧が漂ひ始める。と同時に、さつと一抹掃立てられたやうな形の夕焼雲が、西南から東北方の空へかけて吹流される。炎々として空は燃える。ちやうどその頃である、振返つて乙女峠の方を見ると、思ひも寄らぬ所に突兀として高い山が浮かび出してゐることがある。幾たびか自分の眼を疑ふ。雲だと信じながらも、なほ自分の眼を疑はないではをれぬことがある。

日の影が全く失はれてしまふ。きのふは、をとつひと全然違つた夕焼の空を見た。けふはまた、きのふとは全然違つた夕焼の空を見た。しかも夕焼の空が暮色に包まれてしまつた刹那に、そこにはをとつひも、きのふも、けふも、一



宵の明星  
夕方西方に現  
れる金星。  
欄干として  
きらきらとし  
て。

夜な夜な  
毎夜毎夜。

悠久  
未来のささま  
で。

(一)静岡縣(伊豆  
國)田方郡。日  
金山の別名。  
素絹  
白絹。  
か細い  
ほそい。

様な宵の明星だけが、寒空に欄干として輝いてゐる。同じ夕闇だけが、寂然として谿あひの温泉町を包んでゐる。人々は扉を閉して、寒空の星を見ることをしない。北の風が夜な夜な枯山を掃ふので、空は研ぎすまされてゐる。川は痩せて、巨岩だけが白骨の如く薄闇の底に横たはつてゐる。

そこに立つて人生を考へ、悠久を思ふことが、毎日薄暮の山を下る私の日課となつてしまつた。

太陽が照つてゐる間は、私は山を忘れてゐる。川を忘れてゐる。

日が暮れるにつれて、私は始めて山の形を見、山の深さを知る。川の聲を聞き、川の流を見る。

欄によつて、ペンを走せてゐる手を休めて空を仰ぐと、十國から天城へかけて幾十里の空を、全く素絹を一筋一筋引伸したやうな細かい雲が、空一面を包んでしまつた。何といふ美しさであらう。何といふ莊嚴さであらう。

若し生まれてから死ぬまで一生雲を眺め通しに眺めて、人類の爲に何一つ遺

さないで死んだものがあつたとしても、私はそのものをトルストイより小さい人間だとはいひたくない。

一生涯夜の川の音のみを聽いてゐる男。一生涯木の葉の戦ぎのみを見てゐる男。そのやうな男がいつの世にも一人や二人はあつてもいいはずである。

山を背にし、太陽を背にして本を讀んでゐると、時々山を掠めて走る薄雲が日の光を掠める。そのたんびに本の白いページの上に薄い影が漂ふ。同時に私の心が暗くされる。

雲が通り過ぎてしまふ。日の光がはつと本の白いページの上に明るく漂ふ。私の心が明るくされる。

心の明暗くらの變り易いものはない。一枚の木の葉の戦ぎにも心は動く。南の風が吹く日と、北の風が吹く日と、すでに私たちの心の明暗は違つてゐる。

「春なれや名もなき山の薄霞」の情景には、まだ幾日の隔りがあるやうであるが、伊豆の山の畑の麥は、すでに二三寸に伸びてゐる。青い麥畑の間を點綴する赤い杉苗の爲に、色彩の單調さが破られて、春淺い芝山の眺も、さすがに氣

(Count Iyeff  
Nikolaievich  
Tolstol.  
ロシアの小説  
家、社會改良  
論者、宗教的  
神祕論者。西  
曆一八二八年  
—一九一〇年)

(Page  
(頁)

(三)芭蕉の句



涼々の聲  
さらさらと水の  
流れる音

背戸  
裏口。

色だつて見える。梅はもう盛である。さすがに名もない芝山も、梅あり、椿あつて、旅人の心を引くに足りる。  
天城の麓、谿といふ谿には涼々の聲があり、川のある所谿あひの耕作地があり、家がある。朝、川に沿うて谷を下れば、村のある所必ず朝餉の炊煙が霞の如く、霧の如く芝山の腰に漂うてゐる。このやうな静かな山村の風光を 私は幾年ぶりで見たであらう。汽車がなく、自動車がなく、電車がなく、新聞紙がない山村の生活が羨ましい。

夜の二時三時頃である、谿川の音に夢を破られては、鶏の聲を聴くこともある。子供の頃、父や母がよく一番鶏の聲だの、二番鶏の聲だのといつてゐたことを思ひ出す。あの頃は、父も母も鶏の聲をたよりに起きてゐた。父は背戸の軒下から夜明の星をのぞき見るとは時刻をはかつて、草鞋を穿いて家を出て行つた。曉に近づくにつれて 霧が深く山や平原を埋めてゐた。恐らく都會で育つた子供たちは、曉の鶏鳴の情調を知らないであらう。村の端から、次から次へと家々の鶏が 霧を隔て、流を隔て、森を隔てて鳴いてくる。或時は遠くより

近くへ、或時は近くより遠くへと鳴きわたる。

厩では頻りに馬が板を蹴つてゐる。誰かが鎌を研いでゐる。土間には火がちらちらと闇を嘗めて燃える。憂鬱な田園の朝である。

曉の鶏鳴は過去のさうした景情を蘇らせる。私の心は暗くされる。



(筆琴蕉田勝) 朝るふ雪粉

芝山のふきを歩をつ富

寒念佛  
寒中修業の念  
佛

皚々  
一面に白いさ  
ま

士を見、中央山脈の白皚々たるを見た。松山の中を歩きつゝ、ふと啄木鳥の松の幹をつゝくのを見た。高い松の幹をつゝく、單調な音は冬の山にこだまして、限りもなく寂しい。たゞ一羽こつこつと木をつゝく、啄木鳥の姿は 更にわびしく思はれる。伴もない寒念佛の僧を見るやうだ。



一六 常に新しいといふこと 田山花袋

新しさに向かつて波打つ心は、どんなにいろいろなものを浮かび上らせるだらう。そこには自分ばかりが味はふやうにできてる楽しさもあれば、限り知られぬ不可思議に對する恐しさもある。美しい花も咲いてゐると同時に、凄じい嵐も潜んでゐる。暗い影もある。麗しい光もある。絢爛な更紗模様に似た美しい人の情もあれば、繪の具をそのまま、そこにあげたやうな若い心の姿もある。新しさといふことの楽しさ、それを思つただけでも、誰でも心の心が微かに震へずにはゐられないでせう。

何も考へるには及ばない。何も恐れるには及ばない。新しさといふ心の旗と、眞面目さといふ意志の劔とをかざしてゐるさへすれば、それで何も憂へることはないのである。前途は洋々として春の如

前途洋々

しである。

新しさからあらゆることが始る。新しさには力がある。湧出して湧出しても盡きない力がある。常に新しければ、常に心が活動してゐる。決して倦怠を覺えない。古人が、汚れたら衣を洗ふやうに常に心を洗濯することが必要であるといつたのもそれである。私は常に新しいといふことを祝福したい。

一七 私は自然を禮讚する 野口米次郎

私の自然禮讚は、富士山で始り富士山で終つてゐる。顧ると、私の詩界に於ける旅は短いものでなく、數へるとすでに三十年にも垂んとしてゐるが、一度私の考が自然の慈悲といふことに及ぶと、旅に病んで夢は枯野をかけめぐつた芭蕉のやうに、時と所とを問はず、私はいつも始めて富士山を見上げる少年にたち返り、麗しい曲

禮讚

「旅に病んで夢は枯野をかけた。」  
(芭蕉)



伊勢  
三重縣  
四日市市

線をぐつと曳いた裾野を驅廻る……驅廻るといふ言葉は穩當でない。私は裾野に起ち、富士の尊い圓錐形を眺めて禮拜する。私は見すばらしい田舎の一少年として、始めて船で四日市から東上する朝海上から富士山を眺めた。あゝ、その時……寒風肌を劈く二月の朝であつたが、私に對する自然禮讚の幕は、切つて落された。私はこの莊嚴無比な神の表象を始めて見て、且つ恐れ、且つ敬つた。私が若しこの時富士山から詩の暗示を得なかつたならば、詩人として私の人生は開かれて居らなかつたかも知れない。私の自然禮讚は、富士山で始り富士山で終つてゐるやうに、私の詩人生活も、富士山で始り富士山で終つてゐる。實際、詩人の一生は、自然禮讚の四文字に盡きてゐる。

詩人として私はいつも第一印象の心理状態に支配される。自然の現象もそれがいかなるものであらうとも、自分の特殊な身振、恐

相模  
三浦半  
島の東端

滂沱

しい、或は懐かしい)をして見せるのは、私どもが始めて接する刹那に於てだ。私は十六歳の時始めて富士山を見て以來、今日に至るまで、幾たび富士山の靈姿を、近くからまた遠くから眺めたか知れない。四年前の渡米の際のことだが、船が觀音崎を離れて二三時間も経つと、暮色が波の上に落始めて、薄い灰色の暮色がだんだんと濃くなつて行つた。甲板に立つて、見棄てた日本の空を遙かに眺めると、しよんぼり私を見送つてゐるものがある……幽靈か。さうでない。紫色に空をくつきり染抜いた富士山の圓錐形だ。時も時であるが、私はこの時くらゐ、遺瀨ないもの寂しい孤獨の感に打たれた。ことはなかつた。私は聲こそ出さなかつたが、滂沱たる熱い涙を流した。またこの時の富士山は、悲哀の靈域に入つた美の極致を暗示する世に尊い姿であつた。しかし、私は目を瞑つて心の中で富士山を描く時顯れてくる姿は、私が十六歳の時に始めて接した富士山で



詩  
の  
道

ある。私は長い年月を外國で費したものだ。私の勇氣が急に挫けた時、我はお前を守護してゐる。恐れずに起てよ。起つて天空高く上らねばならない。と私に勢をつけてくれたものは、その富士山であつた。私が失望の闇の中に落ちて、自分の進むべき道を知らなかつた時、我はお前を導いてやる。道は一筋だ。……正義の道には努力の花が咲く。そこには神聖な空氣が満ちる。お前は復活せねばならない。と私を勵ましてくれたものは、その富士山であつた。

「我は階段となつてお前を天に上らせよう。」

「我はお前に教へて神秘の門戸を明けさせよう。」

「我はお前を導いて祈禱の殿堂にはいらせよう。」

と語つて、私の守護神となつたものは、私が始めて眺めた富士山であつた。私はその富士山のお蔭で、その富士山の祝福を受けて、少くとも單純な心と高潔な思想とがどんなものであるかを理解して、

詩歌の道を歩くことができた。私はこれを喜び、これによつて生きて來てゐる。

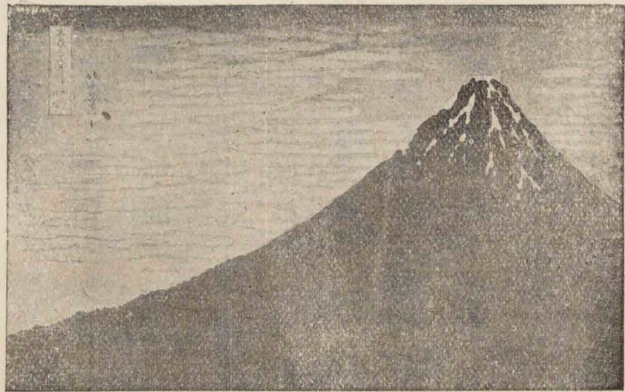
私はここで私の忘れることのできない一挿話を語りたい。時は二十一年前で、場所は驚くべき冬の霧が、鮫か鮫でもあるやうに跳り迫るといふロンドンの町中を、出版者から輕蔑された詩の原稿を後生大事に握りながら、うろつき廻つた。或一夜、詩人ビンヨンに伴なはれて、詩人でもありまた美術家でもあるスタージムアの招待會へ出かけた。その晩も私の心は暗かつた。冷たかつた。ビンヨンの言葉で出かけるには出かけたが、私には談話する勇氣さへもなかつた。私の詩を認めてくれない英國に對し、激烈な反感をもつて居つた。ムーアの宅に着くと、部屋にはすでに澤山なお客が集つてゐて、談話は岸を打つ海の潮の聲のやうに高まり、部屋の中は

(Binyon,  
イギリス人。  
(Sturge Moore)



沽券にかゝは  
る

(一)葛飾北齋。浮  
世繪師。嘉永  
二年(二五〇  
九年)歿。年九  
十。



北齋筆 凱風快晴

ロンドンの夜のやうに煙草の煙で濛々として居つた。無名な私は  
恰もはえか、もろこのやうに、客と客との間を寂しく獨り泳ぎ、我な  
がら勇氣がなく、日東男子の沽券にか  
かはると思つた時、私はふと部屋の壁  
の上に懸けてある北齋の富士を見た。  
……「凱風快晴」の一枚だ。代赭色の圓錐  
形を堂々と兀立せしめた木版繪だ。私  
は富士山が語るやうに感じた、我を見  
て起て。西洋人を睥睨して東海詩人の  
面目を發揮せよ。恐れてはならない。慄  
へてはならない。我はお前に命令する、  
勇氣を出せ。私は直ちに生氣が五體を  
震動させるやうに感じた。私は直ちに多辯になつた。私は直ちに快

活になつた。その時からロンドンの濫面は笑ひ始めた。……私の詩  
集も世に出るに至つた。私は英國文壇にうち勝つた。私はどのくら  
ゐ富士山に負ふところがあるか知れない。實際私は富士山の守護  
で、少くとも詩人としての人生を開拓して來たといつても過言で  
ない。私が英國での第一詩集、東海よりを富士の靈に捧げたのも、當  
然私が拂はねばならない敬意の一端を表示したものに外ならな  
い。

一八 春の樂み

貝原益軒

心づから  
つとめて  
賓客

春はまづ一夜のほどに、あらたまの年立返るあしたの空の光心  
づからにや、古年に變りてのどけし。睦月はことだつとて、貧しき家  
にも春盤などいふものを設く。また土器取出で、大御酒進めて、まづ  
つとめて父母にことぶきし、次に自ら祝し、賓客にももてなすさま



四つの始

けざやか

あらはなり

はだれ

(一)「初春の初子  
のけふの玉は  
はき、手にと  
るからにゆら  
ぐ玉の緒、萬  
葉集、大伴家  
持」  
(二)「花ならで身  
にしむものは  
鶯の、かむら  
なりけり」  
(風雅集、道因  
法師)  
なつさふ  
(三)「韓愈のこと。  
唐の文豪。字  
は退之。長慶文  
は諡。長慶四  
年(西暦八二  
四年)歿。年五  
十七。」

など常に變りていとなんいみじうめづらかなる。時は今四つの始  
なれば、空の氣色やうやうひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠  
き山邊に霞の薄くたな引ける、さまさまに物けざやかに見えて、冬  
の空に立變れる装、まづ春の來れるしあらはなり。垣根隠れに  
冬より残れる雪の、所々はだれに見ゆるも、去年の名残を惜しむべ  
し。待ちわびし梅の匂、百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を  
出で高きに遷る鶯の、春を迎へても、若き聲、初春の初音のけふに  
逢へる、耳とまりてこひしく花ならで身にしむものならし。花を愛  
で鳥を羨むは、これまづ春の賜なり。これを始として、なほ行くさき  
遙かに榮ゆる春の豊かなる惠たのもし。千年を経べき緑の松も、今  
一入の色を増して、常に見馴れしも、いや珍しくなづさはれぬ。韓文  
公が「最是一年春好處」といへりしは、早春の氣色、一年のうちにて殊  
にめづらかに勝れたる故なるべし。

(一)「清少納言。  
(二)「日の光敷し  
のわかればいそ  
の上、ふりそ  
し里に花も咲  
きけり」(古今  
集、布留令  
道)  
日永くして少  
年の如し

老いみいはけ  
み  
(三)「周代の哲學者  
莊子。孟子と  
同時代。」

如月のほどより、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だち  
て、四方山も霞こめたる装、殊に曙の景色譬ふべきものなくあはれ  
むべし。古の人、春は曙といひけんも宜なるかな。日の光敷しわかね  
ば、數ならぬ垣根の内も冬に變りて輝き出で、草木生ひて皆顔色を  
生じ、花待ち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑に  
なりもて行けば、人の業も古年より暇ありていそがはしからず。日  
永くして少年の如く、心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗  
かに霞みわたりたる景色、いと遙けし。夕づけて日はすでに入りぬ  
れど、残れる日影なほ久しきは、日の永きしるしなるべし。この頃は  
陽氣の昇るけにや、わらはべども紙鳶といふものを造り、長き絲つ  
け、風に任せて放てば、高くあがり、雲の上まで遙けくたな引くを戯  
とすれば、老いみいはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野にはまた絲遊  
といふもの、霞の如く地より立騰れり。またかげろふともいふ。莊周



(一)唐の詩人杜甫  
同じく唐の詩  
人杜牧に對し  
て老杜と稱せ  
られる。西曆  
七年(西曆七  
七〇年)歿  
年五十九  
けちめ

消えがて

けおさる



原益軒

はこれを野馬といふ。老杜が詩に「落花遊絲白日靜」といへるもこれ  
ならし。これ皆常にはなきものなるが、春めきていと珍し。また垣根  
の草早く萌出づるを見るにつけても、春の氣は下よりのぼるけぢ  
め、いと明らけし。花もやうやう咲續きて、梅花すでにうつろひて後、  
新たなるは、我が國ならぬ唐桃の花なる  
べし。桃紅なるは、たな引く雲の面影に立  
つ心地す。李白きは、消えがての雪の梢に  
残れるかと見えていと麗し。  
櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけ  
れど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時  
の花の多き中にも、第一の見物なれば、梅散りて後、この頃の異花は  
皆けおされぬ。されど日頃待たせ待たせてやうやう咲けるが、飽く  
まで見るほどもなく、疾く散るはまた恨めし。

(一)續古今集、藤  
原爲家の詠

思ふどち

行樂す

(一)よしさらば散るまでは見じ山櫻  
花のさかりを面かげにして

と古の人の詠みけんも、後の思出にせんとにや情深し。このをりか  
ら、春雨のしきしき降れば、我が宿の園の櫻はいかにあるらんと、う  
しろめたし。柳翠に、花紅にして、春の色を描き出せるは、いと麗しき  
眺なり。  
春やうやく深くなれば、風やはらかに、日暖かに、百草芳を争ひ、群  
花艶を競ふをりなれば、いづれの所か春のなからんや。かゝる景色  
に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあ  
くがれありき、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし、心を快くす  
るわざなれ。世の中のいみじく嬉しきことのあるが中なるその一  
つなるべし。我が心の樂みを知らざる人は、無頼の少年の閑を偷み  
て、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風



(一)幼子を憶ふの詩句  
(二)宋の人。名は博希夷は號。太祖に仕へた。

(三)宋の人休希逸の詩句

(四)宋の人周弼の詩句

(五)白居易の詩句

(六)支那南北朝時代の詩人謝靈運が夢中に得たといふ詩句

(七)山城國(京都府)綴喜郡山吹の名所

裏に空しきもこのをりなり。杜甫が詩に、鶯の歌暖かにして正に繁し。といひ陳希夷が「野花啼鳥一般春」と詠ぜしも、皆この時なり。花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月に酔ひて、二つながら兼ねたる樂み、春宵一刻値千金。花有清香月有陰。といふ詩を思ひ出でられぬ。また惜花朝起早。愛月夜眠遲。といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人の、あたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。また夜の間の風のうしろめたきをも知らず、朝起くることおそきは、花を惜しまざるなり。この頃夕暮は遠き山邊の焼けぬるも、目立つべき見物なり。されば春入焼痕青。といひ、また野火燒不盡。春風吹又生。といへるも、焼野の草を詠ぜしなり。古詩に、池塘春草生。といへりしは、この頃の眼前の景色を、たゞありのまゝにいへるなるべし。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、井手のわたりも見る

めかれせずながめがちなり

(一)巨勢山のつらつら椿つらつらに見れどもあかず巨勢の春野を(萬葉集、坂門人足)いどましく

九十の春光  
(二)「惜しめども春の限りのけふの日の夕暮にさへなりけるかな。」(後撰集、よみ人しらす)  
(三)宋の文豪蘇軾號は東坡。子瞻はその字。徽宗の初年(西曆一〇一六年)歿。年六十六。

心地して賑はしければ、めかれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、たゞ山茶のみ異花にかはりて盛久し。殊更つらをなして植ゑたるつらつら椿、つらつらに見れども飽かず。階のよとの薔薇も夏を待ち顔なり。すべて春は草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどましく、遅く疾く咲きつゞき、餘醜に至りて花のこと終りぬるは、名残惜しと見ゆ。春の花はいづれとなく咲出づる色毎に目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるはうらめし。九十の春光はいと長けれど、何くれとまぎらはしく、風雨もまたしげければ、爲す事なくはかなく過ぎと、いどめあへぬ春の限りのけふの日の夕暮にさへなりぬ。落花寂寂たる黄昏の時は、春の名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」といへる、宜なるかな。

— 樂訓 —



### 一九 人臣の道

北 畠 親 房

凡そ王土に生まれて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

(一) 鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。といふ制符たびたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しける

中五仁事  
抑教(抑教)  
鳥羽院

きほひ争ふ  
前車の轍

(一) 第七十五代崇徳天皇の御世、鳥羽法皇院政を攝せられたる制符

語らはる

に、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なればいひがひなきことになりけり。



北 畠 親 房

この頃の諺には、一たび軍に驅合ひ、或は家の子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては日本國を賜へ。若しは、半國を賜はるとも足るべからず。などぞ申すめる。誠にさまで思ふことにはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、また朝威の輕しさも推しはからるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ、堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふもの

言語は君子の樞機  
堅き氷は霜を履むより至る亂臣賊子

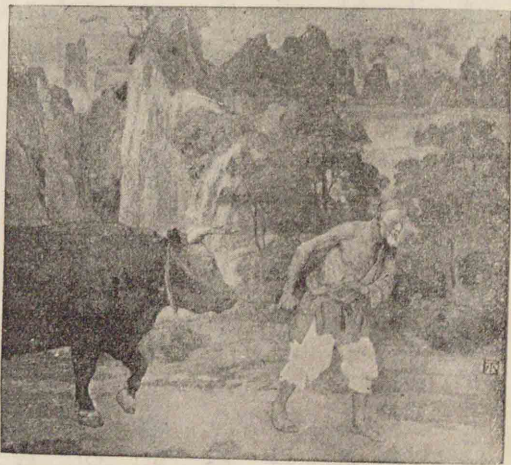


(一)堯の時の隱士  
 (二)支那上古の君  
 (三)支那河南省開封府  
 (四)堯の時の隱士

五臟六腑

萬姓の主

は、そのはじめ心詞を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを宋世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、<sup>(三)</sup>潁川に耳を洗ひき、<sup>(四)</sup>巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながらりて、渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにはあらず、よく思ひならはせる故にこそあらめ。



(筆折不村中) ずは飲に流汚父巢

なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべきことをばなどか顧ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒

(一)平良將の第三子。下總猿島に偽宮を建てて朝儀に擬へた爲に天慶三年(一六〇三)遂に誅せられた。

(二)漢帝の第一代。姓は劉。名は邦。

籌を帷幄の中にめぐらす

たせ給はんことは、推してもはかり奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人は悦ばじ。况んや日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して言葉にも出で、面にも耻づる色のなきを、謀叛のはじめといふべきなり。昔の將門の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲りはべりけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈々衰へたるにや。

漢の高祖の天下をとりしは、蕭何、張良、韓信が力なり。こを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこ



(一)後鳥羽天皇の  
文治五年(一  
八四九年)。  
(二)藤原泰衡。  
(三)畠山重忠。  
(四)昔は奥州五十  
四郡。

の人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少し  
きなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、  
張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし、賴朝の時までも、文  
治の頃にや、奥の泰衡<sup>(二)</sup>を討ちしに、自ら向かふことありしに、平重  
忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望  
むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる少き所を望みて、賜はり  
けりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん爲にや、賢かりけるを  
のこにこそ。

—神皇正統記—

## 二〇 我が國體と萬世一系の信條

准后北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、「大日本は神國  
なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみこの  
事あり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。」とある通り、

異朝

天壤無窮

天照大神以來萬世一系の天皇を上<sup>(一)</sup>に戴いてゐる我が大日本帝國  
が、寶祚と國運と天壤無窮であり、そこに國民の榮があることは我  
が日本に生まれたものの誰も心に思ひ、口にしてゐるところであ  
る。けれども、さてどうして我が日本が神の國として今日まで數千  
年の間傳はり、なほ將來もこの數千年間傳はつて來たいふべから  
ざる一つの力を以て進んで行くかといふことは、建國以來の歴史  
を味はひ、さうしてここに皇室と國民との關係を知り、それに依つ  
て我が國體がいかに自然に發達して來たかを知らなければ、了解  
することはできないのである。

尤も從來傳はつてゐる日本の太古から上代についての歴史が、  
そのまゝ、すべて正確であるとは素より考へることはできない。し  
かしながら、その中に含まれてゐる神話或は傳説の起原、及びその  
發達して來た途をたどつて見て、その神話傳説が萬世一系なる歴



信條

史的事實を基礎として起つてゐるものと考へ得られぬであらうか。また我が日本の上代の神話傳説の中に、この萬世一系といふ信條が活々として在るのは何故であらうか。この意味に於て、我々は從來の傳説に囚はれた行き方でなく、寧ろ今日の文化史的研究の上、に萬世一系の事實があるか否かを、研究して見なければならぬと思ふ。

環境

これについての研究は、まづ人類社會の成立に對して、その環境並びに自然界がどういふ關係であつたかといふことを、地理的にも、生活状態の上からも考へねばならぬ。その關係が我が日本にはいかに現れてゐるか。いかに日本の國家が現れ、日本の社會が現れて來たかを觀察して見ねばならぬ。まづ我が日本の如き島國で、しかも平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのでは、その社會的集團の進みが異なつてゐる。我が國の如

相互依存

き島國や山國では、まづ限られた地方で社會的集團が起るから、他の民族との接觸がよほど後れる。隨つてその社會には生存競争といふことよりも、寧ろ相互に依存する平和な氣分がより多くその社會に現れたであらうと思はれる。まだ原始的の社會であつて、ただ自分等の目に觸れる範圍が世界の全體であると考へて居つた時代に於ては、若し我々の祖先の起つた所が四方山で圍まれ、或は山若しくは海で圍まれた高天原または日高見國といふものであつたとすれば、その狭い小さな世界で一つの社會的集團を作つて行くには、よほど平和的であつて、かの強者が弱者を苦しめるやうな意味はなかつたらうと思ふ。その社會を平和的に作り上げることに進んで行かねば、その社會は滅亡となるのである。このことは社會の一つの細胞ともいふべき家庭の組織についても考へ得ることである。隨つて家庭の組織される本となつてゐる夫婦の成婚



中臣 天智天皇御代  
天智天皇御代  
天智天皇御代  
天智天皇御代  
天智天皇御代

にも、日本の上代の社會に於ては、近親結婚で社會を作り出してゐたことは、神話傳説の中によく現れてゐる。さういふ風でできた家庭は、夫婦、親子の關係は極めて親密であつて、隨つて平和な愛を以て結ばれた社會がここに成立つて來たことを信じ得る。いろいろの條件が、日本の社會の發達の上に備つてゐる。さてこの平和な社會のだんだん發達する具合を見ると、一番初には、別に専門的の職業が各家々にあつたものではなかつたらしい。それがだんだん進んで來た時に於て、その社會の成立やその國民生活に必要な精神的や物質的分業が、自然に行はれて來たものであらう。さうしてその家々の名前は、最初は職業の名前を以て家の名稱とすることに進んで行つたものである。中臣とか、齋部とか、或は物部とかいふ名稱は職業の名稱であるが、それで一つの家の名前ができてゐるのである。この場合に、それがまた國家的組織

氏族制度

すめらみこと

主權者

氏族制度  
すめらみこと  
主權者  
天智天皇御代  
天智天皇御代  
天智天皇御代  
天智天皇御代  
天智天皇御代

と一致してゐるのが、即ちまた我が國上古の氏族制度で、特殊な職業がなく、國家の最高地位を占められる家は、たゞ一軒しかないのであるから、別に家の名稱を呼ばぬ。隨つてこれを作る必要がなく、たゞ尊稱だけを作ればよろしい。今も御上とか、上様とか、陛下とか申し上げれば、天皇陛下の御事であるやうに、大昔から我が皇室には御家名といふものがない。たゞ親王や皇族の御方が別家をなされば、何の宮様と申すのみである。天皇陛下には、すめらみこと、即ち我々を統べてゐられる御方といふやうな意味の尊稱はあるが、それ以上に特別に皇室として御名前を附して、かういふ御家の誰といふ必要はないのである。

主權者の家に名稱をもつてゐない國は、世界中今日に於てたゞ我が大日本帝國あるのみである。いかなる國でも、日本以外の國では皆主權者の家名がある。これは要するにも、國民の一部であつ



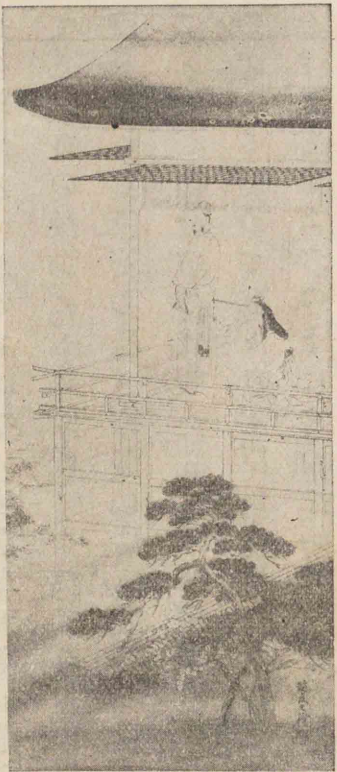
たものが、後に勢力を得て主権者となつたからである。日本の皇室はこの點に於て、社會發達の最初から主権者として今日まで繼續されたことを、事實の上に於て示すもので、實に世界に類例のない萬世一系を、この事實の上に證明してゐるのである。若し日本にいつれの時代にか革命が行はれたものとすれば、現主権者には必ず家の名前がなければならぬはずである。

國民的自覺

根本義

以上の所説によつて、皇室の天壤無窮なるべき天照大神の神勅の、實に皇室にも國民にも國民的自覺を作るべき根原となつてゐる根本義が了解されるであらう。さうして我々がこの建國の昔に遡つて祖先の偉業を回顧する時に、我々は國民としての信仰に生きる。我々はその信仰を益、養成して行かねばならぬ。即ち歴代天皇は萬世一系を事實に於て永久に傳へることに御努力あり、我々日本國民はその意味に於て皇室を御助け申すことに於て努力があ

り、ここに始めて日本民族として進んで來た意義が現れるのである。さうして前に述べた日本の最初にできた家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を推擴げたものが、この皇室と國民との關係



(筆彦柄藤佐) やきかた

となつたので、一に歴代天皇が、義は君臣であるが親みは父子のやうな大御心で國民に君臨され、隨

つて神武天皇から今日まで連綿として皇統を傳へられ、御一人の天皇も國民を虐げられた御方がお出でにならぬといふ美しい歴史となつて現れてゐるのである。武烈天皇の御事蹟として日本書紀にあるのには、朝鮮末多王の事蹟が混入してゐることは、早く學

- (一) 第二十五代。
- (二) 神代から持統天皇時代までの歴史を書いたもの。
- (三) 百濟の暴君。



(一) 第一百五代。

供御

式微

者の定説となつてゐる。さうして仁徳天皇が民家の煙を御覽になつての御聖徳も、醍醐天皇が寒夜に御衣を脱がせられた御事も、皆各時代の天皇の御仁慈の御心が、仁徳天皇や醍醐天皇の御聖徳の上に見れてゐるので、仁徳天皇、醍醐天皇のみが聖徳の天皇であらせられたといふのではない。後奈良天皇が皇室の甚だしく衰微してその日の供御にもお困りになつてゐられたにも係らずなほ宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとされたことは、この皇室の式微から二たび盛な皇運の光がさして來た所以である。随つて我々日本臣民は、皇室の爲に身命を捧げて御奉公をするといふ考の上に立つて、始めてこの萬世一系の皇運を扶翼し奉ることができるのである。

神皇正統記にも、窮りあるべからざるは我が國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣をうけ給ふ皇になんおはします。と

[Moto.]

いつてあり、また「凡そ王土に生まれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。」と述べてゐるのは、親房がいかによく日本國民の精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が服膺すべきモットーであらねばならぬ。

我々は、皇室の繁榮は同時に日本國の繁榮であり、日本國の幸福と一致する皇室の繁榮であるといふことでなければ、建國の大精神と矛盾するものと考へねばならぬ。またそこに始めて天照大神の神勅の意味が強く現れて、日本の國運と民福とが進んでくるのである。即ち我々は外來文化に對して、我が皇室及び國體を中心として、精神的にも物質的にも向上を圖るべきである。皇室及び國體を忘れて、たゞ外來文化に心酔して、國民的自覺を失ふことがあつ



たら、それと同時に日本民族の滅亡が到來する。我々日本國民は永劫にこの大信條の下に進まねばならぬ。——黑板勝美の文による——

二二 春立つころ

金子 薫 園

寒は今最中なり。空晴れて風なく、陽は明らかに照れども、外氣凍りて、觸るゝところ刀の如く人を刺す。深沈として動かざるものあり人の腸を寒うし、また清うせしむ。晶然として咲出づる白梅は、寒の生める花なり。一朶の花、庭の冬枯を領して、地上の權威なり。梅のおもしろみは孤高なるところにあり。その一木の離れたるところにあり。これを聚めて林をなし園をなして、所謂風流人の翫賞に供するに至れば、この花の生地は奪はれたるなり。冬枯の野を行きて、果しなきその荒寥に倦める時、一木の瘦梅白く香を吐きて、ゆくりなく人に迫るを見れば、心寒うして往く。森蔭の土藏のあた

晶然 權威 翫賞 荒寥

り、かじけながら花を着けて清香を送れるは、人をして繪の如く快感を覚えしむ。おあつらへ向の景色の中にはめて愛づる風流人に依つて、この花久しく俗化せられたり。

空碧く瑠璃色に晴れわたりて、地上は風強く吹き、家々の瓦の屋根より屋根に白き埃の飛ぶを見るは、哀しき對象なり。汚れたる硝子の窓越に眺めて、眼痛き心地す。隙間もる埃の風、時に火鉢の灰を起たしめ、讀みさしの書のページを翻す。

温室<sup>ひつち</sup>咲<sup>さ</sup>の菜の花、瓶に挿したるまゝ、幾日をか経けん。火の氣少きも室内は室内なり、花ほうけ、葉は黄に枯れたれど、なほ温かき春色を殘せり。自然の春未だ來らずして、室内の春はすがれんとす。

福は内、鬼は外、柵の葉に寒氣を逐ひやりて、立春來る。青く透徹れるが如き空の色、稍和みて、眼自ら高きに親しむ。晴つゞきて、草ほのかに萌ゆるさまを面影にすれば、忽ちにして雷鳴り、雲來り、春寒肌



に徹す。雪白く積みて、春の行きわたらんとする道に塞がる。春の光を浴びていろいろに飾られんとする市街美は、たゞ一色の白きに劃られぬ。

しかも春はすでに至れるなり。地の底より上らんとする一道の温氣は、淡く雪を敷かして、やがて溶かし行く。雪解のあとの木の根などに萌出でし露のたう、青く鮮かに見ゆ。喘息に惱みし祖母の爲に、残雪を分けて漁りし幼き日を思ふ。

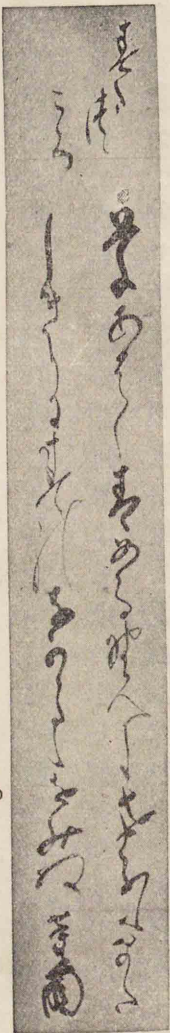
紅梅の花の色は温かうして親しむべし。さはれ、春や昔の名残を留めて今めかず、新人の背景に副はぬ色香なるべき。洛外などのある築土の壞れに、薄き陽の光を受けて行人の思を惹く如き所にこそ、この花の興はあるべけれ。

草青く萌えて、水日毎に温む。野に佇みて杖を立つるに、春の氣の地の底より傳はり來るを覺ゆ。柔かく暖かき思は、この刹那人の胸

今めかず

に運ばる。

桃の節供に近く各地に雛市開かる。東京の十軒店(一)は古くより聞



蹟筆園薫子金

ゆ。雛の如く美しき兒の目につくはこの頃なり。人形天皇の御宇の華やかさは漸く表れ來れるなり。日麗かにして、大路の青柳の絲次第に伸ぶ。  
—自然と愛—

### 二二 早春の賦 阿部次郎

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢れる夏も、靜かに澄みわたりつゝ、鎮まり行く秋も、自然の生命の墓の中に温かに雪に籠る冬も、盛なるにつけ、寂しいにつけ、靜かなるにつけ、

(一)日本橋區にあ

春たつころ  
草あはく青  
める野へに  
けふもまた  
しきりに春  
のなかる  
をみぬ

(二)内裏雛人形  
天皇の御宇と  
かや(芭蕉)



悲しいにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢れるにつけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

しかし、かくいふのは、余と容易に同化し難い季節と、余と最も調子の合ふ季節との差別があることを否定する意味ではない。梅雨の美しさや、雪の美しさを感じるには、余にとつては身神の特に強健で調節された状態が必要である。余の心の痛み易く感じ易い時、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも灰色の空と肌を襲ふ濕潤の氣との厭はしさによつて、凜然たる霜晨の勇ましさよりも裸な土と梢を揺る風の音との峻しさによつて、余の心は容易にかき亂される。これに反し、一年の中最もよく余の心と調を等しくするのは、春の微かに動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へながらも日の光の肌に親しい頃、<sup>暖</sup>温み始めた細流の邊に青いものの漸く芽ぐむ頃である。その時、自然の生命の營はなほ半ば大地の下に

Element

行はれて、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞ぢらひつゝ、しかも怠るところのない伸張を續けて行く。生命の車は未だ全力をつくして急轉することをせず、前途の遙けさを豫想しつゝ、その靜かに緩やかな廻轉を開始する。外に發するよりも内に籠ることを愛する余は、懶惰で急調の旋轉に堪へない余は、しかも内より温める力を自覺せずには生きがひを感じることもできない余は、一年の中この季節に於て、最も自己の<sup>(一)</sup>エレメントにゐることを感ずるのである。かくて余は、晴れた日はひとり野を歩き、丘を行き、春淺い雜木林の下蔭を行きつゝ、頬に冷たい風と背に温かい日の光とを貪り味はふ。書を読みつゝ、夢みるものは旅である。雨に籠つて夢みるものもまた旅である。

余はまた早春に當つて特に幼年の時を回想する。土の下に黒くなつて凍つてゐた雪もいつしか解けて、温かい日の光を吸ふ大地



の面の日毎に廣がり行く時、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過ぎる雪解の水の小流を跨いで獨樂を廻した時分のこと。雪の下に芽を出す笹筍の赤い頭や、露のたうの青い頭を捜しまはる心のときめき。遠山の雪を眺めながら、雪解の水の碧く勢よく流れ行く山川の邊に腰を卸して、詩と人生とを思つた少年の頃。思へばこれ等の人生の早春も、自分にはすでに流れ過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、また櫻が散る。さうして自然はまた余の特愛する第二の季節に——こたびは木々の梢の上にあつて、自然の力が再び籠りつゝ、羞ぢらひつゝ、すくすくと伸行く晩春初夏の節に——入るのである。

——北郊雜記——

蓑蟲と蜘蛛 「自修文」

吉村 冬彦

二階の縁側の硝子戸のすぐ前に、大きな楓が空一杯に枝を擴げてゐる。その枝に澤山な蓑蟲がぶら下つてゐる。

去年の夏中はこの蟲が盛に活動してゐた。いつも午頃になるとはひ出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食つてゐた。身體の割に旺盛な彼等の食慾は、多數な小枝を坊主にしてしまふまでは、満足されなかつた。紅葉が美しくなる頃には、もう活動はしなかつたやうである。とにかく私は日々に變つて行く葉の色彩に注意を奪はれて、暫く蓑蟲の存在などは忘れてゐた。

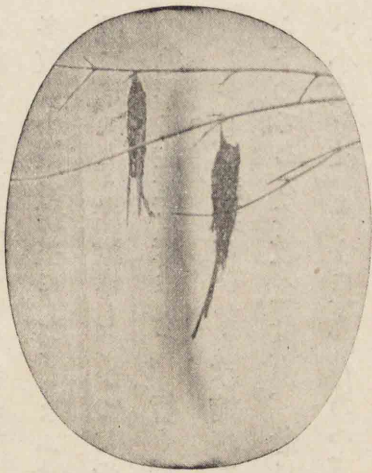
しかし、紅葉がひからび縮れて、やがて散つてしまふと、裸になつた梢にぶら下つてゐる多數の蓑蟲が、急に目立つて來た。大きなのや、小さいのや、長い小枝を杖のやうに下げたのや、枯葉を一枚肩に羽織つたのや、いろいろさまざまな恰好をしたのが、明るい空に對して黒く浮出して見えた。それがその日その日の風に吹かれて揺いでゐた。

かよわい絲でつるされてゐるやうに見えるが、いかなる木枯にも決して吹落されないほど、しつかり取付いてゐるのであつた。縁側から箒の先などではね

旺盛  
さかんなこと。



落さうとしたが、そんなことではなかなか落ちさうもなかつた。自分は多中この死んでゐるか生きてゐるかもわからない蟲の外殻の、鈴生すずなまになつてゐるのを眺めて暮して來た。そして自分自身の生活が、何だかこの蟲のによく似てゐるやうな氣のする時であつた。



蓑

蟲

春がやつて來た。今まで灰色や土色をしてゐたあらゆる落葉樹の梢には、いつとなしにぼうつと赤みがさして來た。鼻の先の例の楓の小枝の尖端も、一つ一つ膨ふくらみを帯びて來て、それがちやうど、ガ一ネットのやうな光澤をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時のことを考へてゐるうちに、それまでにこの蓑蟲を驅除して置く必要を感じて來た。多分ためだらうとは思つたが、試に物干竿の長いのを持つて來て、叩き落しはね落さうとした。しかし、やつぱり無効であつた。はねるたびにあの紡錘形

尖端  
尖つた端。  
(Cannet.  
柘榴石。深紅  
色。

紡錘形  
中央がふくら  
んで両方へだ  
り、両端の尖  
つた圓筒形。

(Propeller  
(推進機)

圓滑な  
圓くすべすべ  
した。  
(Nikel)

の袋は、プロペラーのやうに空中に輪を描いて、廻轉するだけであつた。悪くすると、小枝を折り、若芽を傷つけるばかりである。今度は小さい鋏を出して來て、竿の先に縛りつけた。それは、數年前に流行した、十幾通りの使方のあるといふ西洋鋏である。自分は今その十幾種の外の、もう一つの使方をしようといふのであつた。鋏の發明者も、よもやこれが蓑蟲を取る爲に使はれようとは、思はなかつたらう。鋏の先を半ば開いた形で、竿の先に縛り付けた。圓滑な竹の肌と、ニッケル鍍金の鋏の柄とを縛り合はせるのは、餘り容易でなかつた。

ぶらぶらする竿の先を、狙ねらを定めて蟲の方へ持つて行つた。そして開いた鋏の刃の間に、蟲の袋の口に近い所をくひこませておいて、そつと下から突上げると、案外にうまくちぎれるのであつた。それでも可なりに強い抵抗の爲に、細長い竿は弓状に曲ることもあつた。幸に枝を傷つけないで、袋だけをむしり取ることができたのである。

庭の楓のはあらかた取りつくして、他の樹のも漁あつて歩いた。結局數へて見



たら、大小取交せて四十九個あつた。それを一遍庭の芝生の上におちまけて、並べて見た。

一つ一つ蟲の外殻には、やはりそれぞれの個性があつた。割に大きく長い枯枝の片を並べたのが大多数であるが、中には殆ど目立つほどの枝片は附けないで、溢紙のやうな肌をしてゐるものもあつた。えにしだの豆の莢をうまくつなぎ合はせてゐるものもあつて、それが、のそのそはつて歩いてゐた時の滑稽な様子が自ら想像された。

就中大きなのを選んで袋を切開き、蟲がどうなつてゐるかを見たいと思つた。竿の先の鋏を外して、袋の両端から少しづつ蟲を傷つけないやうに注意しながら切つて行つた。袋の繊維はなかなか強靱であるので、鈍い鋏の刃は屢々切損じて、上滑りをした。やつと取出した蟲は、可なり大きなものであつた。紫黒色の肌がはち切れさうに肥つてゐて、大きな貪慾さうな嘴は、褐色に光つてゐた。袋の暗闇から急に強烈な春の日光に照らされて、蟲のからだにどんな變化が起つてゐるか、それは人間には想像もつかないが、何だか酔つてでもゐるやうに

強靱  
れは強い。

貪慾  
慾げ。

懶げに  
たるさうに。  
大儀さうに。

ひすばる  
乾いて縮まる。  
舍利  
死んでかたくなつたもの。  
制裁  
こらしめ。

(Percent)  
百に對する比  
例。百分比  
(Millimetre)  
一メートルの千分の一。

或はまだ永い眠が覺めきれないやうに、懶げに八對の足を動かしてゐた。芝生の上に置いて、もとの古巢の空殻を頭の所におつつけてやつても、最早それを忘れてしまつたのか、はひこむだけの力がないのか、もうそれきり身體を動かさないで、じつとしてゐた。

もう一つのを開いて見ると、それは身體の下半がひすばつて、舍利になつてゐた。蠶にあるやうな病菌が、やはりこの蟲の世界にも入りこんで、自然の制裁を行つてゐるのかと想像された。しかし、蓑蟲の恐しい敵は、まだ外にあつた。

澤山な袋を外からつまんで見てゐるうちに、中空で蟲の御留守になつてゐるのが、可なり多くのパーセントを占めてゐるのに氣が付いた。よく見てゐると、そのやうなのに限つて、袋の横腹に直径一ミリメートルかそこの小さい孔のあることを發見した。變だと思つて、鋏でその一つを切破つて行く中に、袋の中から思ひがけなく小さい蜘蛛が一足飛出して來て、あわたしくどこかへ逃去つた。ちらりと見ただけであるが、それは薄い紫色をした、かはいらしい小



蜘蛛であつた。

この意外な空巢の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐しい考が、電光のやうに閃いた。それで急いで袋を縦に切開いて見ると、果して袋の底に滓のやうになつた蓑蟲の遺骸の片々が残つてゐた。あの肥大な蟲の汗氣といふ汗氣は、悉く吸ひつくされ嘗めつくされて、たゞ一つまみの灰のやうなものしか残つてゐなかつた。たゞあの堅い褐色の嘴だけは、そのまゝの形を留めてゐた。それは何だか、胃の鉢のやうな恰好にも見られた。灰色の壙穴の底に朽残つた戦衣の屑といつたやうな氣もした。

この恐しい敵は、蓑蟲の難攻不落と頼む外郭の壁上を、忍足ではひあるくに相違ない。そして僅かな弱點を捜しあてて、そこに鋭い毒牙を働かせ始める。壁がやがて破れたと思ふと、もう蓑蟲の脇腹に、一滴の毒液が注射されるのであらう。

人間ならば來年の夏の青葉の夢でも見ながら、安樂な眠に包まれてゐる最中に、突然脇腹を食破る狼の牙を感じるやうなものである。これを拂ひ除ける爲

胃の鉢  
胃の頭に頂く部分  
壙穴  
はかあな  
難攻不落  
攻難くて陥れ難い

殺戮  
ころすこと

一分だめし  
僅かづつにきりさいなまれる

調節  
つりあひをとること

自負心  
うぬぼれ心  
放置す  
そのまゝにほつて置く  
機巧  
たくみ

には、蓑蟲の足は全く無能である。唯一の武器とする嘴を使はうとすると、餘りに窮屈な自分の家は、身體を曲げることを許さない。最期の苦惱にもがくだけの餘裕さへもない。生物の間に行はれる殺戮の中でも、これは恐らく最も残酷なもの一つに相違ない。全く無抵抗な状態に於て、そして苦痛を表現することすら許されないで、一分だめしに殺されるのである。

蟲の肥大な身體は、その十分の一にも足りない小さい蜘蛛の腹の中に消えてしまつてゐる。残つたものは僅かな外皮の屑と、そして依然として小さい蜘蛛一疋の「生命」とである。差引した残りの「物質」は、どうなつたかわからな

い  
蓑蟲が繁殖しようとする所には、自らこの蜘蛛が繁殖して、そこに自然の調節が行はれてゐるのであつた。私が蓑蟲を驅除しなければ、今に楓の葉は食ひつくされるだらうと思つたのは、餘りにあさはかな人間の自負心であつた。寧ろたゞそのまゝにもう少し放置して、自然の機巧を傍觀した方が、よかつたやうに思はれて來たのである。

——冬彦集——



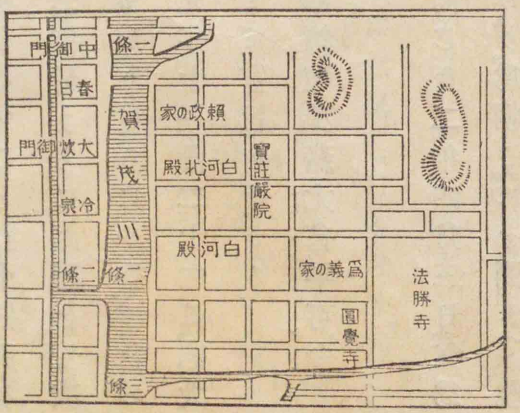




肥後、引志

左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢繼早の手利なり。弓手の肘馬手に四寸伸びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなんとて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の國阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫



器量  
矢繼早  
不敵  
不孝す



(一)筑前國(福岡)糟屋郡香椎村(神功皇后を祀る)

忽諸  
綸言

參洛

解官

を従へんとしければ、菊池、原田を始めとして、所々に城を構へて立籠れば、その儀ならば、いで落して見せん」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十個所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻落して、自ら總追捕使におし成つて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住幸府、忽諸朝憲、咸背綸言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

然れども爲朝は參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使になされけり。爲朝これを聞きて、親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば、我こそいか

(一)漢の高祖の臣、沛縣豐邑の人。勇武、智略の將。高祖を援けて、偉功があつた。  
(二)共に有名な兵法家。  
(三)支那周代の弓術家。百歩距離、射つたといふ。

なる罪科にも行はれんずれ」とて、急ぎ上りければ、國人どもも上洛すべき由申しけれども、大勢にて罷り上らんこと、上聞穩便ならず」とて、形の如くに附従ふ兵ばかり召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺許なる男の、目角二つ切れたるが、紺地にいろいろの絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて、鉞打つたるに、三十六差したる黒羽の矢、負ひ、冑をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が難しとするところを得、弓は養由をも耻ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に



聞ゆる爲朝見んとて舉り給ふ。

左府乃ち合戦の趣計らひ申せ。と宣ひければ、畏まつて爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國のものども従へ候ふについて、大小の合戦數を知らず、中にもせつかくの合戦二十餘個度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること夜討に如くこと候はず。然ればたゞ今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はん、火を遁れんものは矢を免るべからず。矢を恐れんものは火を遁るべからず。主上の御方、心にくくも候はず。但し兄にて候ふ義朝などこそ驅出でんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。まして清盛などがへろへろ矢、何ほどのことか候ふべき。鎧の袖にて拂ひ蹴散らして捨てなん。行幸他所へ成らば御免されを蒙つて、御供のもの少々射んずるほどならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃去り候はんずらん。その時爲朝參り向かひ、

(一)假内裏、後白河天皇の御所。

心にくし

へろへろ矢

駕輿丁

掌を反す如し

4ヤヌ

行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に即けまゐらせんこと、掌を反す如くに候ふべし。主上を迎へまゐらせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、



(筆崎香口谷) 戦 奮 朝 爲

何の疑か候ふべき。と、憚るところもなく申したりければ、左府、爲朝が申すやう、以ての外、荒儀なり。年の若きがいたすところか。夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上、上皇の御國争に、源平數をつくして両方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝことあり、興福寺の信

むげに



(一)頼長の父忠實。

先蹤

奥義

實、玄實等、吉野十津川の指矢三町、遠矢八町といふものどもを召具して、千餘騎にて参るが、今夜は宇治に着き、富家殿(一)の見参に入り、曉これへ参るべし。彼等を待調へて合戦をばいたすべし。また明日院司の公卿、殿上人を催さんに、参らざるものどもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること、両三人に及ばば、残りなどは参らざるべき。と仰せられければ、爲朝上には承服申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば、合戦の道をば、武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたるものなれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候はん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれど、たゞ今押寄せて風上に火をかけたらんには、戦ふともいかでか利あらんや。敵勝つに乗るほどならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。とぞ申しける。

——保元物語——

### 二四 扇の的

さるほどに、阿波、讃岐に平家に叛きて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、ここの洞より、十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せ來るほどに、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向かつて漕寄せ、渚より七八段許にもなりしかば、舟を横ざまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より年のよはひ十八九許なる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挟み立て、陸へ向かつてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。と宣へば、射よとにこそ候ふらめ。但し大將軍の矢おもてに進んで、けいせいを御覽せら

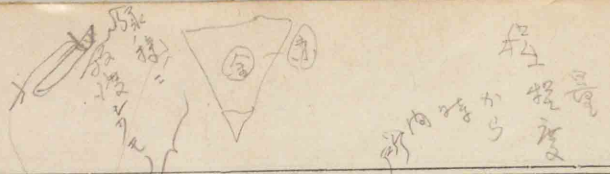
二四 扇の的

(一)源九郎判官義經。尋常に飾る

五つぎぬ

舟のせがい

矢おもて



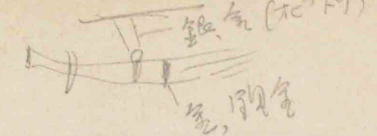


てだれ

小兵

れんところを、てだれに狙つて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらん」と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある」と問ひ給へば、てだれども多う候ふなかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ小兵に候へども、手はきいて候」と申す。判官、證據があるか、「さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候」と申しければ、判官「さらば與一呼べ」とて召されけり。

與一その頃は、未だ二十許の男なり。褐に赤地の錦をもつて、おほくびはたそでいろへたる直垂にもよぎ緘の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四五さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わりあはせて、はいだりけるぬだめの鏑をぞさし添へたる。重籐の弓脇に挟み、冑をば脱いで高紐にかけ、判官の御前に畏まる。判官、いかに與一。あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし」と宣へば、與



いろいろ  
 扇の  
 矢の  
 羽の  
 重籐の  
 弓

一定

仔細を存す

御説

「仕ることも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候ふべし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候ふらん」と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向かはんずるものどもは、皆義経が下知を背くべからず。それにも少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾う疾う鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん。さ候はば外れんをば存じ候はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ。とて、御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まるほやすつたる金覆輪の鞍おきて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

身方の兵ども、與一が後を遙かに見送つて、この若者一定仕らうずると覺え候」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のなか一段許うち入つたりけれども、な



(一)壽永三年。  
酉の刻  
すくしに定まら  
はれならずと  
いふことなし

ほ扇のあはひは、七段許もあらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十  
八日酉の刻許のことなるに、をりふし北風烈しう吹きければ、磯う  
つ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりすゑて漂へば、扇もくしに定  
まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。くがに  
は源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも、はれなら  
ずといふことなし。與一目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我  
が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあ  
の扇の真中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓き  
り折り自害して、人に再びおもてを向かふべからず。今一度本國に  
歸さんと思し召さば、この矢外させ給ふな。と、心の中に祈念して、目  
を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつた  
りけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふ  
でう、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑はうら響くほどに長鳴りして、あや

ひいふつと  
一もみ二もみ  
籛

またず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ  
入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、  
海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日に輝く  
に、白波の上に漂ひ、浮きつ沈みつゆられけるを、沖には平家舷を叩  
いて感じたり。くがには源氏籛を叩いてどよめきけり。

—平家物語—

二五 仁は心のいのち 室 鳩 巢

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脉に現れ、心の元  
氣は愛に現る。脉の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心  
死するほどに、仁は心のいのちとも申すべし。それ心は活物なるに  
より、人に情あり、ものの哀を知りて、常にいきたるものぞかし。より  
て父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては



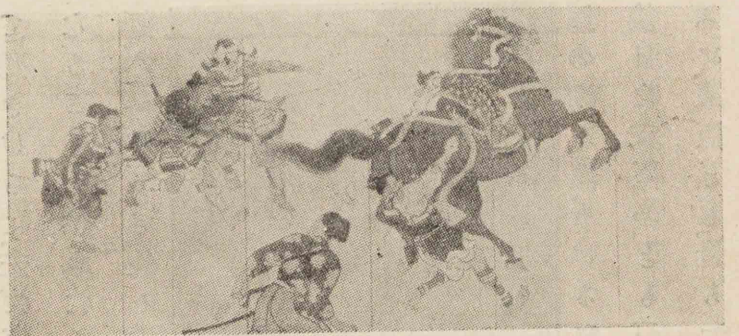




くらひや  
武邊

頼朝の弟範賴  
梶原景季

も候はぬに、君には御感涙に咽せられて候。これはいかがのことに

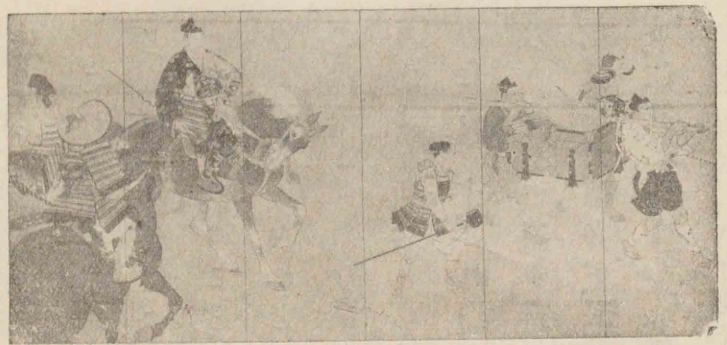


一のそ (筆雲紅東伊) きづけい

て候ふにや、今に不審なることにいづれも  
申し合ひ候。といへば、天徳寺驚きて、たゞ今  
までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の  
一言にて、さてさて力を落して候。まづ佐々  
木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、  
舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原に  
も賜はらぬ生暖を、高綱に賜はるにあらざ  
や。さればそのかひもなく、この馬にて宇治  
川を先陣せずして、人に先をこされなば、必  
ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞し  
て出でける、その志を察して見られよ。哀な  
らぬことかは。とて、屢涙を拭ひつゝ、暫しあ

(一)頼朝の弟範賴  
(二)梶原景季。

武邊



二のそ (筆雲紅東伊) きづけい

りていひけるは、また那須與一も大勢の中  
より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、  
馬を海中に乗入れて的に向かふに至るま  
で、源平両家鳴りを静めてこれを見物する  
に、若し射損じなば、身方の名折たるべし、馬  
上にて腹搔切つて海に入らんと覺悟した  
る心を察して見られ候へ。武士の道ほど哀  
なるものは候はず。某は毎に戰場に臨みて  
は、高綱、宗高が心にて槍を取り候ふ故、右の  
平家を聴く時も、兩人の心を思ひやりて、落  
涙に堪へざりき。然るに、各には哀になかり  
しと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は

たゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思



迷惑す

惻隱

はれ候。それにてはたのもしからずこそ候へ。」といひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。

これ天徳寺が武邊は涙より出づれば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらざや。然るに武は殺獲のことにて、手荒き道なれば、いはば仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは、眞の武にあらざ。況んやその餘のことは、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ほひわたりて發するにあらざれば、眞のものにあらざ。これ則ち前にいひし人に情ありものの哀を知るの心なり。すべて諸の言行共に、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天徳寺が涙をこぼすやうにだにあらば、これ心徳の全きなり。仁者といはんには何の疑かあるべき。

——駿臺雜話——

笑〔自修文〕

人間は笑ふ動物だとか聞いてゐた。なるほど人間以外、笑つたといふ動物のことは見たことは勿論、聞いたこともない。尤も笑以外の感情でも、人間以外他の動物は完全に表しはしない。動物が悲しんだといふことも、笑つたといふのと同様、見聞きしたことはない。

或紀行文に 隊商の駱駝が悲しんでゐる様子の書いてあつたのを讀んだことはあつたが、いかなる感情の表白でも、動物が示し得た例は甚だ稀であらう。但しアラビヤン・ナイトなどを讀んで見ると、人間が動物にその姿をかへられて悲しんでゐるといふやうな話は、よく出遇ふところであるが、なるほどさういはれると、そんな場合でも悲みの方はあるが、喜を表白して笑つたなどいふのは、餘り多くはない。いかにも牛にでも馬にでもげらげら笑はれたら、をかしいよりも、氣味が悪くなる。考へてもそんなのはよい圖ではない。さうして見ると、笑ふのは人間ばかりかなと考へざるを得ない。「自然」にも笑ふ方は少いといへようか。無論「自然」は無心で、その感情といつては、見る人の心から、

隊商 おもにアラビヤの沙漠などを隊をなして歩く商人

表白 あらはし。

(1) Arabian 有名なアラビヤのおとぎばなし集の名

Nights



昂然  
元氣のさかん  
なさま

哄笑  
聲高くわらふ  
こと。たか  
らひ。  
失笑  
こらへきれな  
いで笑ふ。  
き出す。

その心を「自然」に擬したに過ぎないのであるが、波浪が怒るとか、山岳が昂然として控へてゐるとかいつた類の形容は、随分よく見受ける。たゞ流が笑つてゐるなどは、たまたまに聞くところである。また花笑ひ鳥歌ふともいふから、「自然」の笑といふことも、可なりあるやうにも思はれる。たゞその笑は微笑にとゞまつて、笑の一部分に過ぎぬのは、是非もないことである。

ところが、人間にはいろいろな笑がある。哄笑、放笑、失笑、冷笑、苦笑、微笑。近頃ではそれでも事足りないと思へて、微苦笑なんて、老人にはとてもわかりさうもない笑方までできて來た。これは人間の進むにつれて笑の變化し、また複雑になる證據であらう。そして人の感情の變化は、一番よく笑に顯れるのであらうと思はれる。

漢字漢語では右の通りであるが、日本の假名で行くと、またいろいろな笑方がある。にこにこ笑ふ。にやにや笑ふ。くすくす笑ふ。げたげた笑ふ。げらげら笑ふのはお化であるが、「うらめしや」といつて出てくる幽霊などより、かう笑つてゐる化物は甚だ愛敬がある。それからまた、かんらからからなんとい

(一)昔支那の惠遠  
或といふ法師が  
或といふ隱居し  
てて虎を渡して  
渡るといふ時  
渡るといふ時  
或といふ友人が  
或といふ友人が  
虎を過ぐす時  
虎が氣附いて三  
人に氣附いて三  
と人が大故して  
虎が氣附いて三  
徳化縣の盧山  
にある谷の盧山

ふ笑ひやうがある。これも甚だむづかしい笑方であるが、これは天狗の笑方であるから、誰もあんまり見聞きしたことはない。見聞きしたら、これも氣味が悪い方であらう。なほ笑の音響にもいろいろある。アハハ オホホ、エヘヘ



(筆折不村中) 笑三の溪鹿

フッフツなんていふかと思ふと、大勢一緒になると、一度にドツと笑ふとなる。かうなると、あらゆる假名を用ひなければならぬのみならず、同じにやにや笑ふとしても



拈華微笑  
釋迦が多くの弟子を集めた前、誰れもその意味を知らず、たゞ遊業一人の笑事とたがふたがたといふ故事

「お前なんだつて青山せいざんなどに隠れてしまふんだ。」と聞かれて、「笑つて答へず心自ら閑なり。」なんて澄ましたのは李白であつたか、よく覺えてゐないが、とかく支那の先生の笑はむづかしくなる。尤もむづかしい姿といへば、拈華微笑といふのがある。あれはたしか御釋迦様が多くの弟子たちに拈華された時のことだとか聞いてゐるが、佛道の悟があの一旬の中にあるとか。かうなると、笑もなかなか樂ではない。

一體外國の文學には、意味の深いをかしみなどは随分澤山あるが、日本にはどうも、をかしみを書いたものが乏しい。殊にしかつめらしい武士道のお蔭で笑はその影を潜めてしまつた。膝栗毛ひざぐりをかしいにはをかしいが、それこそ私たちに顔をもむけずには居られないやうな笑をもつて得意としてゐるのが多い。狂言の中には、随分微笑をさせるものもあれば、哄笑をさそふものもある。武士道の天下にも、なほこんなもののあるのは有難いが、今日では、この武士道の笑を噛みつぶした習慣からと、今一つには、今日の切迫した生活からとで笑が殆どなくなつてゐるのは情ない次第で、笑事ではない。

Dickens  
イギリスの小説家(西暦一八七〇年)  
"Pickwick" 書名  
劈頭 けじめ

心理  
心のありさま

ディッケンス(一)のピクキック(二)には、その劈頭へきとうに、風に帽子を吹飛ばされた時の心持が、おもしろく書いてある。その一節は、殊に笑なくしては讀むことはできないが、事實風に帽子を取られた時の人の態度は、をかしなものである。あれくらゐ眞劍と滑稽とを併せて顯した圖はあるまい。否、眞劍だから滑稽をなすのではあるが、その時の人の笑顔を示してゐる。しかし、心持は決して笑つてはゐない。買ひたての帽子を汚された怨や、他から見られた體面と自分の努力といつたやうないろいろなことが混じ合つて、當人の心には、甚だ複雑な感が互に衝突してゐるのであらうが、その結果は、自分を嘲るやうな妙な苦笑のやうな笑となつて、それが顯れるのであらう。

急いで馳せつけた電車に乘損のりそとねた時も、大抵の人は笑つてゐる。實は笑つて居り得べき時ではない。惜しいことをした。口惜しいといふ感じのあるべきところだが、あれも人から見られて體裁が悪いといふ爲からか、やはり一種苦笑のやうな笑をするのだらう。事は簡單だが、あれなどもなかなか複雑な心理から出た笑である。



對角的反對  
全くの反對  
(一)平景清、惡七兵衛といふ。

謠曲  
うたひ。

忘形見  
父の死んだ後に生まれた子。こゝでは景清が家を出てから生まれた子で、まだ見たことのないもの。  
(二)美尾屋國俊、源氏方の武士。  
兜の鉢から左右と後方とに垂れて首をおぼふもの。

とはいふものの、大抵の人は大事な際には決して笑ひはしない。大事に際して笑つてゐるのは、あはうか豪傑ばかりだ。即ち大事に際して濟まして笑つたやうな心持でゐるのは、いや、所謂拈華微笑の心を持してゐるのは、あはうとは對角的反對をなしてゐるえらい人だ。それとは異なつてゐるが、私は作話のうち、この笑の忘れられないおもしろさをもつた一つの例として、景清の笑を挙げたいと思ふ。

私のいふ景清とは、謠曲にあるそれであるが、その景清は必ずしも笑つてゐるのではない。が、心持は聊か笑つてゐる。盲乞食となつた景清は、日向の國に忍んでゐた。そこへその忘形見である娘が尋ねてくる。景清は心強くも、所謂武士道の心といふのであらう、景清などいふ男は知らないといつて、その娘を逐ひかへすのであるが、里人の口から事實が漏れて、それが娘の探す父なる景清であることがわかり、止むなく親子の對面をなし、わざわざ乞食なる自分を遠く關東から尋ねて來た心根を察して、その昔平家一方の旗頭として屋島に戦ひ、敵將美尾屋と渡り合つたその所謂しころ引の一段を物語つて聞かすので

覇氣  
意氣ごみ。

昔日の笑  
屋島で戦つた時の笑。

(一)戸川明三、英文學者。熊本縣の人。明治三年生。

ある。時世非にして、今は盲乞食となつた老景清も、昔を想ひ浮かべて、なほ残る一片不屈の覇氣を見せるところ、誠に笑ひどころではない、寧ろ落涙を催させるほどに緊張したものであるが、そのつかんだしころの切れた一段を語つて、美尾屋が「汝の腕の強さの恐しさよ。」といへば、景清は「美尾屋が頸の骨こそ強けれ。」と笑つて、左右へ退いたといふその笑こそ、極めて複雑な笑で、實はそれはその時の笑でなく、昔日の笑であるが、その氣分に至つては、この物語をしてゐる老衰な景清にまだ残つてゐるので、その笑の氣持が、頗る複雑なものとなるのである。私には景清の一曲、殊にこの昔の笑の氣分が、たまたまなくよくて、忘れられないのである。

(一)戸川秋骨の文による――

### 二六 文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國



(一)字は孟徳、勢を得て魏の國  
 後漢の獻帝建  
 安二十五年  
 (西曆二二〇  
 年)歿。  
 (二)曹丕「短歌行」  
 に「月明星希  
 烏鵲南飛」  
 (三)源滿仲の子。  
 武勇の將。治  
 安元年(一六  
 八一年)歿。  
 (四)頼光の弟。武  
 勇の將。永承  
 八年(一七〇  
 八年)歿。  
 (五)「吹く風をな  
 こその關と思  
 へども、道も  
 せに散る山櫻  
 かな」  
 (六)今の巖手縣  
 (陸中國)膽澤  
 郡衣川村。昔  
 ここに關所が  
 在った。  
 (七)爲朝の父、六  
 條判官源爲義  
 保元亂に崇  
 徳土皇に身方  
 に斬られた。清盛  
 に斬られた。

の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は、一入懐かしい心  
 持がする。魏の曹操はその事功の上から見ては餘り好かれぬ人物  
 であるが、藥を横たへて月明らかに星希に」と歌つた一事を想ひ出  
 す、何となく慕はしくなつてくる。  
 源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、  
 勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな」と詠んだ風流、衣川に  
 矢を番ひて「衣のたてはほころびにけり」と呼止めた情致がある爲  
 で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似のできぬ  
 ところ。源三位頼政のしひを拾ひて世を渡るかな」は餘り感心せぬ  
 が、弓張月のいるに任せて、埋木の花さくこともなかりしに」などの  
 韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小  
 楠公をして一層美的ならしめるのは、かりの契をいかで結ばん」の  
 歌と、梓弓なき數にいる」の辭世とである。平忠盛に「波ばかりこそよ

(八)義朝の長子。  
 叔父源太を斬  
 り、源太を義朝  
 の死後平家に  
 斬られた。  
 (九)「登るべき便  
 なき身は木の  
 下に、しひを  
 拾ひて世を渡  
 るかな」  
 (一〇)時鳥名をも  
 雲井にあぐる  
 かな、弓張月  
 のいるに任せ  
 て」  
 (一一)埋木の花さ  
 りしにもなか  
 りなはてぞあ  
 はれなりける。  
 (一二)とも世に  
 ながらぬ身の  
 かりの契を、  
 かり結ばん」  
 (一三)「歸らじとか  
 かり思へば梓  
 弓、なき數に  
 どの名をぞと  
 どむる」  
 (一四)鳥羽上皇に  
 群卿にそれま

ると見えしか。の風流があつて、眇の俄殿上人も、優に優しい感じを  
 與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の陸奥のいは  
 でのぶはえぞ知らぬ」を思へば、義經や範頼を殺すほどの人とは  
 思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流談が混つてゐたらう  
 と想像される。  
 その子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第  
 一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、ここに最大な發達を遂げて居  
 る。頼朝の霸業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文  
 學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で  
 風流談のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその  
 人の缺點まで掩ふやうな心持がする。  
 實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るもの  
 は、薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、



忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久な語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事がらである。それであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が随分多かつた。承久の役に院宣を讀み得る人がなかつたなどといふのは、眞の武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もまたそれぞれ詠歌をもにして居る。上杉謙信が霜滿軍營の一吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流

襟度  
想望す

れ、豊明の節  
會に身の跡を  
取立てて辱し  
められた。  
(五)有明の月も  
あかしの浦風  
に、波ばかり  
こそよると見  
えしか。  
(一)平清盛。  
(二)陸奥のいは  
でしのぶはえ  
ぞ知らぬ、書  
きつくしてよ  
壺のいしぶみ。  
(三)忠盛の子。一  
の谷の戦に戦  
死した。  
(一)承久三年(一  
八八一年)後  
鳥羽上皇が北  
條氏討滅を企  
てられた時の  
亂。  
(二)九月十三夜  
の詩句。

韻事の傳はらないのは、何となくもの足りない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲漢の妻臥病牀兒叫飢、橋本景岳の誰知松柏後凋心、賴三樹三郎の誰題日本古狂生をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつて居る。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人、その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

(一)訣別の詩句

(二)獄中作の詩句

(三)辭世の詩句

(四)野村もと、出家して望東尼といつた。明治維新勤王の女丈夫。



二七 高名の木のぼり 吉田兼好

高名の木のぼりといひし男、人をおきて、高き木に昇せて、梢を  
きらせしに、いと危く見えしほどはいふこともなくて、おるゝ時に、  
軒たけばかりになりて、過すな心しておりよ、と言葉をかけはべり  
しを、かばかりになりては、飛びおるゝともおりなん、いかにかくい  
ふぞ、と申しはべりしかば、そのことに候、目くるめき、枝危きほどは、  
おのれが恐れはべれば申さず、過は安き所になりて、必ず仕ること  
に候、といふ。あやしき下藤なれども、聖人の誠にかなへり。鞠も難き  
所を蹴いだして後易く思へば、必ずおつとはべるやらん。

あやしき下藤

もろ矢

或人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて、的にむかふ。師の  
いはく、初心の人、ふたつの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初

の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、このひと箭に定むべ  
しと思へ。といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせ  
んと思はんや。けたいの心みづから知らずと雖も、師これを知る。こ  
のいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕べには且あらんこ  
とを思ひ、且には夕べあらんことを思ひて、重ねて懇に修せんこと  
を期す。いはんや、一刹那のうちにおいて、けたいの心あることを知  
らんや。何ぞたゞ今の一念に於いて、直ちにすることの甚だ難き。

人の心すなほならねば、いつはりなきにしもあらず。されど、自ら  
正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨  
むは世の常なり。いたりて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見て  
これを憎む。大きな利を得んが爲に、少しきの利を受けず、いつは  
り飾りて名を立てんとす。とそしる。おのれが心に違へるによりて



驥(一)支那古代の聖天子。有虞氏。

(二)第四十二代。

(三)我が國の神代から推古天皇までの歴史書。

この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず。いはりて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。いつはりても賢を學ばんを賢といふべし。

—徒然草—

### 二八 明淨直

五十 嵐 力

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、「明き淨き直き誠の心」といふ詞がある。我等はこの「明き淨き直き心」が日本人の性質の核となり中心となるものであると考へる。この詞は代々の詔勅に幾度も幾度も繰返されてゐる。しかも重きを措いて繰返されてゐる。その他、古事記、日本書紀、萬葉集などにも、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中に深く感じた

賦與す

こと、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて出たのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱せられる現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅などの諸性質は、概ねこの明、淨、直の三大性質を基本として説明されるらしく、殊に三種の神器がこの三大性質の標章として遺憾がないやうに思はれる。次に、抽象的ではあるが、一通りその理由を説明しよう。

鏡の性は明で、その徳は玲瓏透徹に物を映することである。日本人は鏡のやうな明き心で、正しく事物を觀た。故にその觀方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は鏡を齋きて、「我が大御前を見るが如くせよ」と仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔勅や、祝詞や、君臣應對の詞などに、明き心といふ語が澤山用ひ



折衷性

られてゐる。これ等はいづれもこの性質が、我が國民の心底に根深く植附けられてゐる證據であると思ふ。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治社會、宗教などの諸方面にわたつて、諸外國に見るやうな非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、またいつもそれが調和する傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相争ふが、やがてお互にそれには道理も無理もあることを解すると、ばからしくなつて、最早爭論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騷亂で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣、父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が文藝の獎勵に骨折るのも、群雄

騎虎の勢

(一)新納武蔵守忠元の作

(二)イエルサレムの聖地を回教徒であるトルコ人から奪還する爲に起つた一七〇九年の戦役(西暦一七〇九年)に於て、十字軍の右肩に赤十字の記章を附けた故にこの名がある。

(三)西暦一七九九年、佛國ルイ十六世の時、起つた革命。一七九二年、ナポレオンが大統領となつて、洞然とした。

濁濁

割據の亂世に陣中かゞり火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に、敵ぞとて何かは人の憎からん、同じ御國の同じ身なれば、と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士につくすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見ることが明らかで、理に従ふことが流れるやうな根本性によるのではあるまいか。大和民族は十字軍やフランス革命のやうな極端な狂言を演ずるのには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正といひ、理に鋭いといひ、感情の平靜を保つといひ、何事をも受容れる胸懷の洞然たる人種であるといつた外人の批評は、強ちでたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てゐるが、同じではない。その違ふ趣は、ちやうど鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢濁濁を忌むことは、清明共に同様であるが、清はそれ以



上に味はひのあり温かみのあることを要する。譬へば、鏡は空白で正しく物を映すれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映ずることを要しないで、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣のあることを要するやうなものである。本来日本人は、明らかに事物を見る長所を有するばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。その明は空白の明ではなくて、温潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶、夜光珠の明である。我が國は、古來、禊祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且つ重要視されてゐた。祝詞、宣命を始めとして、多くの歌詠、諷諭は明き心を現しながら、趣味、風韻に富んでゐる。しかもその趣味や形容が、諸外國、例へば支那の文字に見るが如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戰陣の間に花を鬩し、歌詠を贈答し、或は胃に

むくつけし

香を焼きしめるといふやうな嗜があつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれにふさはしい文字をもつてゐる。外國出稼の労働者が、その日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢をもたぬものはなく、そしてこれは外國の労働者に絶えて見ないところといはれてゐる。大工、指物屋の手に成るはかない家具や細工物も、西洋の表面だけ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えない裏面にまでも手をつくすといふ嗜がある。これ等はいづれも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあるまいか。我等は、日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す。といった一外國人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふのである。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。その厭ふところは躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲ること、拗れること、

首鼠兩端



邪なことである。叢雲の劔はその標章としてこの上なくふさはしい。元來直の徳の本領は、心の明らかに見たところに向かつて直前するのにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明はその靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見たところを意が直進して實現する。そして知の見方、意の働き方に、潔くていひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格といふべきであらう。明き心を以て、<sup>(一)</sup>父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし。故にその明き心の示すところに従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君、<sup>(二)</sup>現つ神として國に臨み給ふさまが、限りなく高く貴い。故に直前して、<sup>(三)</sup>海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍の獻身的奉公を致すのである。そしてその君父に事へ、妻子を愛しむや、多くは水臭い思慮、分別、利害勘定の結果でなく、眞實掬すべき趣があつた。ここが眞淵、宣長等の國學者が感歎

(一)「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし」云々  
(萬葉集、山上憶良)

(二)「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」大君のへにこそ死なめ、へり見はせじか  
(萬葉集、大伴家持)

し、自負して措かなかつた點である。無論何處の國にも文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の性向があつたであらうし、日本民族にも利害勘定の行爲がなかつたとはいはれないであらう。また自然眞實の行爲に弊害が伴はないともいはれないであらう。けれども、我が民族の特徴の一面は、とにかくこの點に存したやうに思はれる。その例は、遠い昔では、素戔嗚命に見ることができ、あの日本武尊も素戔嗚命系の勇者である。次いで、鎮西八郎爲朝の腕白、勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも素戔嗚命系の大立者。これ等いづれも向ふ見ずのやうでありながらも、妙に情に厚いところがあり、君父のこととあれば、水火も辭せず、直前するといふ風があつた。直斷、決勇の權化で、確かに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローであつた。その他、<sup>(一)</sup>蒙古來寇の時に西海の將士が身命を棄てて防戦した態度を見よ、<sup>(二)</sup>代々の武士が、<sup>(三)</sup>千

(一)Hiro.  
(弘安四年、九四一年)

(二)高橋龜麿の歌、萬葉集にある。



(一)和田義盛の三男義秀。安房國朝夷郡(今、安房郡)に生れたので、朝比奈と稱した。比奈と稱した。豪勇無雙の士。豁然大悟

依怙 利潤

(二)山本常朝の著。俗に「佐賀論語」と稱せられる。「業隠」中に在る詞

よろづの軍なりとも言あげせず、取りて來ぬべき男とぞ思ふ。」といふやうな斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠や加藤清正の如く、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇されるのを見よ。曾我五郎朝比奈三郎のやうな一徹者が國民に愛せられるのを見よ。豁然大悟の禪宗が盛に行はれたのを見よ。眞偽は知らないが、正直は一旦の依怙にあらざると雖も、終に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰にあたる。」といふ戒が、天照大御神の御言葉として神道家に唱へられてゐた。武士には「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすれば取る。武士は物事手取早くするものぞといふことが、武士道の金誠になつてゐた。これ等はいづれも直を好む性質が、大和民族の心性の基本、精髓をなしてゐる證據である。

二九 三つの眺

煌々

群陰皆影を伏す 有象無象

(一)賀茂直淵の門人荷田若生子の歌。

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることもできないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない。清涼の光である。皎潔無垢崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じずる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人の胸懷に浸みわたることは、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。(一)うちむかふ月は一つの影なが



嗟歎す  
感吟

古往今來

ら、うかぶは千々の思なりけり。である。  
東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光  
に向かつて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟  
は、世界各國の文學に充ち満ちて居る。天文學者はいふ、月は地球の  
衛星で、全く死んだ冷塊である。と。この冷たい光が、古往今來どれほ  
どの暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久  
に人間の友である。

乾坤を一つに  
す  
（一）新續古今集、  
僧仙覺の歌。  
（二）唐の詩人白樂  
天の句。  
廣寒宮

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を  
以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同  
じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降る  
み吉野の山。といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてし  
まふ。三千世界銀成色。十二樓臺玉作層。の美觀は、一切の人間界の醜  
を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から

瓊玉を敷く

對照の妙  
造化の巧

落ちてくるこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感  
じられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘  
して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に  
人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭で  
も、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉いろいろな眺はもと  
より美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるや  
うな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬  
物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を  
つくしたものではないか。一年中蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、  
決して我等の世界ほど楽しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春  
の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさ  
まざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れ



棺郭

(一)「年ふれば、  
は老いぬしが  
はあれど、花  
をいれども  
のおもひもな  
し。」(古今集、  
藤原良房)

るのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限な詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれほど寂莫を感じるのであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺郭を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ花をし見ればものもおひもなし。といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。

(一)「新古今集、  
康  
資王の母の歌。」

(二)「古今集、  
清原  
深養父の歌。」

(三)「謡曲、  
葛城」の  
句。

月雪花三つの眺には各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことはできぬ。

(一) やま櫻花の下風吹きにけり

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

(二) ふゆながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるなん

これは雪を花に譬へたのである。

(三) 笠は重し吳山の雪、鞋はかんばし楚地の花、肩上の笠には無影

の月を傾け、櫓頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月、花を愛して雪を賞でぬ人もない。



寸紅

(一)C. H. W. 瓦斯 不夜城の觀

(二)伊藤仁齋の歌

(三)唐の劉廷芝が「百頭を悲しむ翁に代りて」の詩句

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉されてゐる極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人に寸紅の目を楽しませしめるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見たことがない。(一)ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることができない。我等日本人の昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歴史が加つて一層の感興が増す。(二)世々を経ながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照らす鏡である。(三)年年歳歳花相似、歳歳年年人不同。(四)人生の感は花を見て益、繁く、雪を見て愈、多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたる

よ。いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

三〇 樹の根 和辻 哲郎

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へて見たことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、長い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落着いた、潤ほひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうな、しをらしい色艶を増してくる。雨のあとで太陽が輝きだすと、早朝のやうな爽やかな氣分が、樹の色や光のうちに漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感じられる。をりふしかはい、小鳥の群が、活々した聲で囀り交はして、緑の葉の間を

生の喜



樂しさうに往き來する。それが私の親しい松の樹であつた。然るに或時、私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所に佇んで、砂の中にくひこんだ複雑な根を見まもることができた。地上と地下との姿が、何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、それに比べて地下の根は、戦ひもがき、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに枝から枝と分れて、亂れた女の髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つては、ゐた。しかし、それを目の前にまざまざと見た時には、思はず驚異の感に打たれぬわけには行かなかつた。私は長い馴染の間にこのやうな地下の苦みが、不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時をりに

吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が、一月以上も續いた後であつた。しかし、その叫聲や、萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に返つて、苦みの痕をめつたにあとに遺さない。しかも彼等は私たちの眼に秘められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も、葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親みを感じずるやうになつた。彼等は私どもと共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐることだが、私には新しい事實としか思はれなかつた。

## 二

成長を欲するものはまづ根を確かにおろさなくてはならぬ。



上に伸びることを欲するな。まづ下にくひいることに努めよ。

三

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下にくひいることに没頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいい頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とをもちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きることの苦しさ、に壓倒されて、自分のやうなもの、は生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかし、それは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生まれるはずはない。

地殼

四

古來の偉人には、雄大な根の營があつた。その故に彼等の仕事は、味はへば味はふほど、深い味はひを示してくる。

現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすると、それが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種ができるだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で、纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸すことができない。

天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生まれるはずがない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬である。ことを考へて見なければならぬ。

墮す











